

# 東方機動戦士～幻想の少女とガンダム～

蒼窮

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

東方とガンダムが好きなので作つてみました！

東方キャラがMSに乗つて異変解決したらどうなるかなー。

という感じで、キャラがMSで戦います！！

初めての小説でガンダム初心者ですがよろしくお願ひします!!

# 目次

## 次

### 紅魔郷編

第一話 「暗闇に潜む電撃」

第二話 「湖の勝利者?」

第三話 「門前の龍」

第四話 「地下大図書館の力天使」

第五話 「迫る槍と刃」

第六話 「紅い館の蒼き能天使」

第七話 「次の運命」

第八話 「地下牢」

第九話 「精霊と反逆の翼」

第十話 「エピオン、出撃」

第十一話 「紅い空での決闘」

第十二話 「紅の終焉」

### 妖々夢編

第十三話 「春の吹雪」

第十四話 「猫と虎」

第十五話 「操られし誘導弾」

第十六話 「冥界の桜」

第十七話 「美しく優雅な光」

第十八話 「紅白の蝶は春へ向かう」

第十九話 「春の決闘」

第二十話 「花見の季節」

### 萃夢想編

第二十一話 「密と疎」

第二十二話 「太古の機動兵器」

永夜抄編

第二十三話 「偽りの満月、自由の翼」

第二十四話 「夜空の蟲と唄」

第二十五話 「歴史に消えた人里」

## 紅魔郷編

### 第一話 「暗闇に潜む電撃」

昼の幻想郷。

紅い霧によつて出来た暗闇の中を飛行する一機のMSの存在があつた。

GAT-X105「エーラストライクガンダム」だ。

それに搭乗するのは博麗神社の巫女「博麗靈夢」である。

彼女、正確には彼女達は幻想郷の空を覆う紅い霧を不審に思つたため、

紅い霧を出していると思われる館にMSを使って乗り込もうという事だ。

また、靈夢の他に魔法使いで靈夢の親友である「霧雨魔理沙」が、GAT-X303「イージスガンダム」で靈夢とは別ルートでその館へ向かっている。

筈である。

靈夢が少々不安になつていて、レーダーに反応があつた。数百メートル先にMSが存在するというのだ。それは肉眼でも確認出来る距離だつた。

MSの小さな影がコツクピットから靈夢にも見えたのだ。こんな時間にフラフラ飛行している辺り、同業者では無いことは明確だつた。

搭乗者は八割型妖怪としか考えられなかつた。

靈夢のストライクは地上に着地した。

靈夢「まさかMSに遭遇するとはねえ。」

敵MSが上空を通過するのを待つ。

敵が上空を通過した後、奇襲する為だ。

一方、敵MSの解析を急ぐ。

靈夢「GAT-X207ブリツツガンダム・・・」

靈夢は少し驚いてしまつた。

形式はストライクと同じ「G A T—I X」だからだ。

思い出せば河童の工場で見たことのある機体であった。

靈夢「妖怪に盗まれたつて所かしらね。河童の警備も手薄なものね。」

M Sの開発は河童が行っている。

この靈夢のストライクも河童のアジトからロールアウトした物である。

靈夢「・・・さて、行くわよ。」

ブリツツが上空を通過したと同時にストライクは勢い良く上昇した。

靈夢「この！」

ストライクはビームサーベルを取り出しブリツツに斬りかかる。が、スレスレの所でかわされてしまった。ブリツツはストライクに気が付いた素振りを見せていない。なのにかわされてしまったのだ。しかも、

靈夢「!」

ブリツツは突如として姿を消したのだ。

靈夢「どういう・・ことなの？」

ブリツツは跡形も無く消えてしまつた。

高速移動した訳でもない。一瞬にして姿を消したのだ。

靈夢が驚愕していると後ろからレーザーライフルが放たれた。

間一髪の所でその攻撃をかわし、ビームライフルで応戦するが手応えは無かつた。

靈夢「どうやら、透明になつた様ね。」

靈夢はミラージュコロイドによつてブリツツが透明になつたと悟つた。

それと同時に、

靈夢「でも、レーダーの目はござまかせないわよ！」

靈夢はレーダーの位置情報を元に持つていたビームサーベルを投擲した。

すると、

ルーミア「ううく、痛いのだ、」

見事にブリツツの左腕に突き刺さったのだ。

靈夢「このチャンスを逃す訳にはいかないわね!!」

ストライクはもう一本のビームサーベルを取り出し、ブリツツに向けて加速した。

しかし、ブリツツも黙っている訳が無く反撃を開始した。

ブリツツはトリケロスからランサーサーダートが発射する。

靈夢「そんなので！」

ストライクはそれを避けてビームサーベルでブリツツに再度斬りかかる。

が、今度はトリケロスで防御されてしまう。

ルーミア「何度も同じ手は喰わないのだ！」

ブリツツのパイロットであるルーミアは上機嫌になる。

しかし、

靈夢「ふふふ、掛かつたわね！」

ストライクはビームライフルをブリツツの腹部に向けて発射する。ビームはブリツツの腹部突き抜けた。

ルーミア「あ・・・」

ストライクが離れると同時にブリツツは爆発する。

パイロットであるルーミアは、河童の「強制脱出装置」のおかげで生きている様だ。

靈夢「河童の脱出装置のおかげね。まあ、紫の提案だったかしらね。」

幻想郷のMSには強制脱出装置が必ず組み込まれている。

武装等の制作より先に取り付けられる。

靈夢「ま、ちよつとの事で気を抜いてたら、私には勝てないわね。」

靈夢がそう呟くと同時にストライクに通信が入った。

紫「お疲れ様。」

靈夢「紫じやない。何の用？」

紫「何の用? ジゃないわよ。「ソードストライカ」をスキマ経由で送るわよ。」

靈夢「あく、そだつたわね。」

ストライクの真下に大きなスキマが出現する。

靈夢はエールストライカーモードから離し、スキマへ落下させた。すると、少し先にスキマが出現し、中からソードストライカーモードが飛び出てきた。

紫「それじやあ、頑張つてね♪」

靈夢「・・・」

靈夢はストライクにランチャーストライカーモードを装着させると、館に向かって一気に加速した。

後方では脱出ポッドから出てくるルーミアが見えた。

大破したブリツツガンドムは徐々に透明になつていき、数十秒で消滅した。

これも紫の考案した「消滅装置」である。

戦闘不能になつたMSは数十秒たつと消滅するのだ。

どういう原理かは謎だが、残骸を回収する必要が無くなるのであつた。

靈夢「そろそろ館ね。魔理紗がもう来てるといいけど。」

紅魔館 門前

美鈴「・・・ついに来たな、MS!!」

その館「紅魔館」の門の前には門番である「ドラゴンガンドム」の姿があつた。

## 第二話 「湖の勝利者？」

湖の上をG A T—X 303 「イージスガンダム」はM A形態で飛行している。

目指すのは紅い霧を出していると思われる館だ。

その館はつい数日前に突如として出現したとされている。

どんな人間が住んでいるかも分からぬ謎の館だ。

イージスのパイロットである「霧雨魔理沙」はその謎めいた館に興味があった。

異変解決が目的だが、その館にあるであろう金銀財宝を頂いていうとも考えていた。

金銀財宝の事を考えていた魔理沙は上機嫌だつたが、一つだけ不可解な事があった。

魔理沙「ここら辺には妖精がいた筈だが、一匹もいないじゃないか。」

そう、湖にいるであろう妖精が姿を消していたのだ。

昨日までは、妖精達が鉄か何かを運んでる姿が魔理沙には見えていたのだ。

妖精達が飽きっぽいので、もうその事に飽きたのかもしれない。  
だから、姿を消す。それはおかしかつた。

魔理沙「うーん、嫌な予感がするぜ。」

魔理沙はそこら辺を見て回る事にした。妖精達が何かを企んでいた。  
そう考えたのだ。まず、妖精が鉄を運ぶなんてどこか馬鹿げている。  
た。

理由も目的もまったく見当がつかない。

魔理沙「・・・アレだな！つて、あれはMS!?」

魔理沙には白いMSを囲む大勢の妖精の姿が見えた。  
そして今、一匹の妖精がコックピットに乗り込んだ。

MSの緑色のデュアルアイが発光する。

魔理沙「ちつ、起動したか。」

イージスはMS形態に変形して妖精達の近くに降り立つた。

妖精達はMSの出現に驚愕、困惑の表情を示している。

? 「ふ、丁度いい!! チルノ様とヴィクトリーの力を見せつけてやる

!!

チルノはLM312V04「ヴィクトリーガンダム」を立ち上がらせる。

魔理沙 「ガンダムか? ヴィクトリーって言つたな。」

チルノ 「このっ!」

ヴィクトリーは前腕内部からからビームサーベルを取り出し、ビーム刃を出現させて

イージスに斬りかかる。

魔理沙 「おつと。」

イージスはジャンプで後退、ヴィクトリーの攻撃を避けた。

魔理沙 「そんなんじゃ当たらないぜ!」

イージスは両脚のビームサーベルを出現させ、ヴィクトリーに向かつて前進しながらも蹴りを入れる。

チルノ 「のわあつ!」

何とか一撃目をかわすヴィクトリーだつたが、

二撃、三撃目が、右肩、サイドスカートに命中する。

チルノ 「まだまだ!」

今度は、ヴィクトリーがビームサーベルを横に薙ぎ払つた。

しかし、イージスはまたもジャンプによつてその攻撃を回避、上昇した。

魔理沙 「落ちろ!!」

イージスはヴィクトリーに対してビームライフルを乱射する。

ヴィクトリーはビームシールドを展開、ビームを防いだ。

チルノ 「当たれ!!」

そして、ビーム刃を扇状に展開させてイージスに向けて投擲した。

投擲された扇状のビームサーベルは、八つ裂きの様になつてイージスに向かう。

魔理沙 「くそつ!」

イージスは後方へ加速する事で振り切ろうとするが、投擲されたビームサーベルは

真っ直ぐイージスへ迫つていった。

とうとう、イージスの腕部にわずか数メートルの所まで迫る。しかし、イージスは

腕部のビームサーベルを出現させ、それを横に払つた。

チルノ「何!?」

魔理沙「今度はこっちの番だ!! イージスのスキュラが火を吹くぜ!!!」

イージスはMA形態に変形、ヴィクトリー目掛けて加速した。

そして、両手、両脚部を開き、580mm複列位相エネルギー砲「スキュラ」を発射した。

チルノ「うわっ!」

ビームシールドでビームを防ぐが、その衝撃は大きかつた。

ヴィクトリーがしゃがみ込んだその時、後ろから緑色のMSLM11E02「ガンイージ」が向かつて来た。

大妖精「チルノちゃん、大丈夫!?」

チルノ「う、うん、あたいは大丈夫。」

魔理沙「お、もう一機出てきたな。にしても小さいMSだな。」

イージスとヴィクトリーの全高の差は3メートル程だつた。

余談だが、一般的なMSは18メートル前後だという。

魔理沙「さて、もう時間もないし、ケリをつけるぜ!!」

イージスはヴィクトリーに向かつてスキュラを数発発射した後に、MS形態に変形、

さらにビームライフルを連射した。

チルノ「うん、もう限界かな。つて、うわ!!」

大勢のビーム砲がヴィクトリーの近くに雨の様に降つてきた。

パイロットが油断していたため、ヴィクトリーはスキュラが一発右腕に直撃、

ビームライフルが頭部、右足に数発当たつてしまつた。

チルノ「うう。」

ヴィクトリーガンダムはその場に倒れた。上半身は凍っていた湖を突き抜け湖の中へ入つてしまつたが、コックピットから脱出ポッドが射出された。

魔理沙「パイロットは出たみたいだな。」

それを確認すると、イージスは再びMA形態に変形して館を目指して加速した。

魔理沙「あいつらも懲りただろうし、少し遅れるが結果オーライだな。」

魔理沙はそう呟くとイージスの推力を一気に上げた。遠くに見えていた館に一気に近づいていく。

魔理沙「あ、危な」

イージスはその館「紅魔館」の壙に激突した。

魔理沙「マズいな。」

### 第三話 「門前の龍」

靈夢「あれが館ね。」

ソードストライクは紅い霧を出していると思われる館に到着した。

靈夢「つて、本当にあの館から霧が出てるのね・・・」

今まででは疑惑だけだつたが、靈夢には館から出てくる紅い霧を目撃した。

よつて、犯人はこの館にいる人間か妖怪とう事になる。

靈夢「あれはMSね。」

靈夢には門の前に立つドラゴンガンダムの姿が見えた。  
どうやらこちらの事に気が付いているらしく、じつとこちらの様子を伺っている。

美鈴「来たな、MS！目的は一体何だ！」

ドラゴンガンダムからパイロットの「紅美鈴」の声が聞こえた。

靈夢「この館から出てる紅い霧、迷惑なのよ。やめて貰いたいんだけど。」

美鈴「ふ、それは出来ないな。」

ドラゴンガンダムは腕を前に突き出す。

靈夢「そう。なら、あなたを倒して先に進むしかなさそうね。」

美鈴「私を倒すか・・・それは無理だな!!」

そう叫ぶと「ドラゴンクロ一」を射出、ソードストライクに襲いかかる。

靈夢「そんな攻撃で！」

ソードストライクは空中へ上昇、ドラゴンクロ一に向かつてビームブームラン

「マイダスマツサー」を投擲した。

美鈴「当たるか！」

美鈴はドラゴンクロ一を戻し、マイダスマツサーを回避した。

マイダスマツサーは地面に刺さる。

靈夢「ちつ、」

ソードストライクはバツクパツクから15.78m対艦刀「シユベ

ルトゲベール」を取り出し、構え、空中から地上のドラゴンガンダム目掛けて突進していった。

美鈴「そんな攻撃が当たるか!!」

宣言通りドラゴンガンダムはソードストライクの攻撃を避けた。

シユベルトゲベールは地面に突き刺さる。

美鈴「これでその対艦刀は使えない、今度はこつちの番だ!!」

靈夢「それはどうかしらね。」

なんと、ドラゴンガンダムの左腕はソードストライクの腕部にあるロケットアンカー「パンツアーアイゼン」のクローラーによつて挟まれていたのだ。

美鈴「何!?」

ドラゴンガンダムはクローラーを外そつと必死にもがく。その間にソードストライクは

シユベルトゲベールを地面から引く抜く。

美鈴「え、ええい、こんな腕、欲しけりやくれたやる!!」

ドラゴンガンダムは右腕で右肩から「フェイロンフラッグ」一本取り出し、側面から旗布状にビームを展開、左腕を切り落とした。

靈夢「なつ！」

美鈴「まだ、まだあ！」

ドラゴンガンダムは右手に持つていたフェイロンフラッグを投擲した。次から次へとフェイロンフラッグを取り出し、ビーム刃を出現させては次々に投擲した。

靈夢「無茶苦茶ね・・・」

ソードストライクは飛んで来るフェイロンフラッグを、シユベルトゲベールで縦へ、横へ払っていく。

美鈴「これが最後か・・・」

ドラゴンガンダムは最後のフェイロンフラッグを、バツクパツクから取り出しビームを刃を展開、投擲した。

靈夢「おつと。」

しかし、最後のフェイロンフラッグもシユベルトゲベールで、横へ振り払われてしまう。そのフェイロンフラッグは館の方へ飛ん

で行き、門を破壊した。

美鈴「し、しまった!!」

しかし、ドラゴンガンダムは右腕のドラゴンクロールから「ドラゴンファイヤー」発射した。が、ソードストライクは館の敷地内にジャンプしてその火炎をかわす。

靈夢「それじやあね。」

美鈴「ま、待て！逃がすか!!無影脚!!」

ドラゴンガンダムは空中に大きく跳躍、脚の影が映らないほど速さで連続蹴りを行いながら、ソードストライクに近づいていく。

靈夢「掛かつたわね！」

美鈴「え？」

ソードストライクは、空中から蹴りを入れようと近づいてくるドラゴンガンダムを、

シユベルトゲベールで下から大きく薙ぎ払った。

美鈴「うわああああ!!」

ドラゴンガンダムは遙か後方へ吹っ飛んでいった。ドラゴンガンダムは地面に思い切り叩きつけられ、全体の装甲が傷ついた。

靈夢「ふう、終わつたわね。」

ソードストライクはシユベルトゲベールをバックパックに取り付けると、館の扉の方へ歩いていった。

靈夢は紫に通信を入れる。

靈夢「パイロットは気絶した様ね。先に進むわ。」

紫「お疲れ様。」

靈夢「ねえ、それより魔理沙は？」

紫「あら、あなたがドラゴンガンダムと交戦してる間に到着してるのでよ。」

靈夢「え？」

靈夢は横を向いた。すると、館の壙に激突するMA形態のイージスガンダムの姿があつた。

靈夢「はあ。何やつてるんだか。」

紫「それより、最後のストライカーパックを試してみる？」

靈夢「じゃあ、次の戦いで使うわ。」

紫「了解♪」

スキマが空中に出現し、中から「ランチャーストライカー」が出てきた。

ストライクはストライカーパックを換装、「ランチャーストライク」になつた。

靈夢「行きますか。」

紅魔館 時計台

咲夜「さすが、博麗の巫女。」

時計台の近くには、腕を組んで立つメイド長「十六夜咲夜」の姿があつた。

一方、ランチャーストライクは館の大きな扉を開けて内部に入つていった。

靈夢「さつきの戦い、誰かに見られてた気がするわね。」

靈夢のその予想は的中していたのだった。

## 第四話 「地下大図書館の力天使」

紅魔館の主「レミリア・スカーレット」の親友である「パチュリー・ノーレッジ」は、常に地下図書館「ヴァル魔法図書館」で本を読んでいる。

彼女は体が病弱で喘息持ちで日光を嫌う為、外に出ない。

激しい運動などは勿論出来ない。

その彼女の体质はMSにも色濃く反映されていた。

彼女の操るMSはGN-005「ガンダムヴァーチュ」である。

砲撃型MSである為、戦場において頻繁に移動を行う訳ではない。装甲は強固であり、機動性も低い、しかし重量時代は軽量である。

彼女と非常に共通点の多いMSである。

装甲が強固であるからして、コックピットに衝撃が来る事は滅多に無い。

病弱な彼女が気絶する心配もないのだ。

彼女がヴァーチュを起動させる機会はほとんど無い。

主にメイド長の十六夜咲夜が敵の相手をする為だ。

しかし、霧雨魔理沙が乗機であるイージスガンダムを紅魔館の堀に激突させた事で、

ヴァーチュは起動の時を迎える事となる。

魔理沙「マズいな。」

魔理沙はスラスターの推力を上げ過ぎた為、堀に激突してしまった。

イージス自体に損傷はほとんど無かったが、住人に来た事が気が付かれるかもしれない。結果的に損害はあった。

イージスが堀に激突した事にいち早く気が付いたのは、パチュリーであった。

パチュリー「外が騒がしいわね。」

衝撃が地下まで届いたのだ。MSの仕業だろう。パチュリーはそう考えた。

パチュリ「ヴァーチエの出番ね。」

極力MSを使う事は避けていたパチュリだつが、レミリアの目的の為にはやむを得ない事だつた。

魔理沙「どうするかな。」

バカ正直に扉から中へ入るなんて事は出来ない。  
しかし、

魔理沙「あれは・・・ストライク。靈夢か？」

靈夢はランチャーストライクで、堂々と扉から館の中へ入つていつたのだ。

魔理沙「あれじやあ、入つた途端迎撃されるのがオチだぜ。」

それを悟つた魔理沙は、慎重に館の中に侵入する事にした。

イージスをMS形態に変形させて、腕部ビームサーベルで館の壁を

慎重に斬り開く。

そのつもりだつが、

魔理沙「こ、これは。」

イージスは左斜め下に落下していつた為、敷地内の土を少し掘つて  
いた。

なんと、そこから壁が見えたのだ。

魔理沙「ち、地下があるのか？」

地下でMSの生産、管理をしている可能性もあるので、魔理沙は地下に行く事にした。

ミニピュレーターで穴を掘つていく。

魔理紗「よし。」

數十分後、イージスが入れるくらいまで穴を掘つたので、壁を腕部

ビームサーベルで

切り開いていく。

魔理沙「よし、通れるな。」

壁を切り開いていくと、見えたのは無数もの本だつた。

魔理沙「図書館か何かか？」

本棚が何個もあり、とても取り出せなさそうな位置にまで本棚が積

み重なつていた。

魔理沙「ラツキー。誰もいないみたいだから適当に借りていくか。」  
コツクピットのハッチを開け、行動に移ろうとしている。

パチュリー「それは出来ないわ。」

本棚が横にスライドして中から重MSが姿を現した。

魔理沙「おつ、出てきたな。」

パチュリー「レミイの邪魔をしないで。今なら見逃してあげるわ。」

帰りなさい。」

魔理沙「それは出来ないな。紅い霧を止める為に来たんだ。」

パチュリー「そう。なら、」

ヴァーチェはイージスに「GNバズーカ」を向ける。両手で構え

ビーム砲が発射される。

魔理沙「な、なんて威力だ。」

イージスがビーム砲をかわし、本棚にビーム砲が当たる、当たつた  
筈だが・・・

魔理沙「な、なんでだ。本棚に当たつた筈なのに・・・。」

そう、本棚はまったく無傷だった。何の変哲もない普通の本棚が、  
ビーム砲の直撃を受けて平気な訳がない。

魔理沙「ど、どういう事だ！」

パチュリー「本棚にはちよつとした魔法をかけたの。戦闘で傷つか  
ない様に。」

魔理沙「お、お前、魔法使いか？」

パチュリー「ええ、その通り。」

ヴァーチェはGNバズーカを再度発射する。しかし、イージスは  
ビーム砲をよける。

魔理沙「当たるか！これでも喰らえ!!」

イージスはヴァーチェに向かつてビームライフルを撃つ。  
しかし、機体を覆うシールドの様な物にビームは弾かれてしまつ  
た。

魔理沙「ビームのシールドがあるのか!?」

パチュリー「ビームではなくは粒子よ。」

ヴァーチエはGNバズーカを胸部の太陽炉と接続させ、さらに変形させて、バーストモードに移行させた。そして三度、砲門をイージスに向けた。

パチュリ「これで終わりよ。」

砲門から巨大なビームが発射される。

魔理沙「ここでやられるもんか!!」

地下図書館で巨大な爆発が起きる。相変わらず本棚は無傷。これ程の攻撃を受ければイージスは耐え切れず爆発する筈だ。

パチュリ「終わつたわね。」

GNシールドが消えたその瞬間、地上に上がっていたMA形態のイージスがスキュラを連射した。全てが背部と両脚部の大型のGNフィールド発生器に命中した。

パチュリ「キヤツ!!・・・うつ。」

パチュリは気絶。よつて、戦闘は終了した。

魔理沙「ふう、危なかつたぜ。」

## 第五話 「迫る槍と刃」

イーディスガンダムはガンダムヴァーチェとの戦闘に勝利した。

ヴァーチェのパイロットであるパチュリィが気絶した為、イーディスを図書館の中に移動させて、魔理沙は図書館に星の数程ある本を物色していた。

魔理沙「ん~。何でこうも読めない字で書かれている本が多いんだ？」

図書館には人間に読めない字で書かれている本が多く、魔理沙は目ぼしい本を探すのに苦労していた。異変解決が目的の為、図書館に長居も出来ない。

魔理沙「しようがない。先に進むか。」

手に持つていた本を近くに放り投げ、イーディスのコツクピットに戻ろうとしている。

小悪魔「あ~！パチュリィ様の大切な『本を！』

魔理沙「げつ、もう一人いたのか。」

後ろから声を掛けられる。気が付けば魔理沙の足元には本が数百冊散乱していた。

口調などからしてパチュリィの従者か何かだろう。魔理沙はそう考えた。

魔理沙「い、いや~。パチュリィさんから本を借りようと思つて来たら、え~と、

図書館が荒らされてて・・侵入者の仕業だと思ひますよ?だから私は・・帰るぜ。」

魔理沙の必死の弁解だった。勿論あいてはどこぞの妖精ではない。

小悪魔「その侵入者はあなたじやないんですか?」

魔理沙「そ、そんなわけない・・・ぜ!」

緊張と少しの混乱のせいで、先程から魔理沙喋り方はおかしい。

小悪魔「嘘ですね!あなたが後ろのMSで図書館を荒らしたんじゃないんですか?」

小悪魔の質問に対し、魔理沙はイーディスのコツクピットへ歩きなが

ら話す。

魔理沙「そいつは少し違うぜ。私は図書館を荒らすのにMSは使って無い!!」

魔理沙はイージスに乗り込む。デュアルアイが発光し、立ち上がる。

小悪魔「あなたが一人でこんなに荒らしたんですか!?」

魔理沙「ああ、その通りだ。」

小悪魔はその事実を聞いて驚愕すると、どこかへ走つていった。

魔理沙「ん?まさかもう一機MSがあるのか?」

魔理沙の叫んだ声が消えるや否や、ヴァーチェの出てきた場所から逆の方向にある本棚が左右にスライドし、XM-07「ビギナ・ギナ」が姿を現した。

小悪魔「よくもパチュリー様のご本を!!」

右手に持つていた「ショットランサー」のランスがイージスに向かつて射出される。

その攻撃に備えてイージスはシールドを構えるが、射出されたランスは、シールドを容易に貫ける程度の威力を有していた。

魔理沙「何!?

シールドの先端に刺さった為、ランスが本体まで届かなかつたのがせめてもの救いだつた。

小悪魔「もう、シールドは使えまい!!」

魔理沙「こんなシールド、欲しけりやくれてやるぜ!!」

イージスはランスの刺さつたままのシールドを、ビギナ・ギナに向かつて投擲する。

小悪魔「あああ！」

シールドは無防備のビギナ・ギナの胸部に突き刺さる。幸いにも爆発は起こさなかつた。小悪魔の入つた脱出ポッドがコックピットから射出される。

魔理沙「それじやあな。後で本を借りに戻つてくるよ。」

小悪魔「ううん。あく。」

小悪魔の目には渦巻きが映つていた。

紅魔館 口ビー

靈夢「あら？ 誰もいの？こここの主を出しなさい！」

ランチャーストライクは、MSが歩き回れる程大きい館のロビーをウロウロしていた。

咲夜「お嬢様はお見えになりません。私がお相手をしましよう。」階段を上がった二階に十六夜咲夜の搭乗した、GN-001「ガンダムエクシア」があつた。

靈夢「あら、そう。でも私はあんたを倒して先に進むわよ？」

咲夜「博麗の巫女。あなたを紅魔館から追い出すよう。と命じられました。これ以上先に進ませるつもりありません。」

靈夢「へえ。この館、紅魔館って言うのね。」

若干だが二人の話は噛み合つてない。が、両者はそんな事を気にしながらつた。

靈夢「行くわよ！」

ランチャーストライクはエクシアに、右肩に装着される「120m対艦バルカン砲」を発射する。

咲夜「バルカン砲では、ね。」

咲夜のエクシアは壁を走るなど、俊敏な行動でバルカンを全弾回避してみせた。

靈夢「すばしっこいMSね！」

エクシアが壁を蹴り、床に着地したタイミングを見計らつて、ランチャーストライクは約20メートルもの全長を持つ大型のビーム砲「320mm超高インパルス砲「アグニ」を発射した。

しかし、それもかわされ、ビーム砲は紅魔館の壁を貫いた。

咲夜「出来れば館を壊してほしくない物ね。」

靈夢「紅い霧で異変起こしてるあんた達に、言えることじやないわよ。」

咲夜「ごもつとも。」

靈夢「み、認めるのね。」

この戦闘中の少し抜けた会話も幻想郷独自のモノなのだろうか。

大した幻想である。

エクシアは、ライフルモードだったGNソードをソードモードに戻して、ランチャーストライクに斬りかかる。

ランチャーストライクは120mm対艦バルカン砲で迎撃を行うが、GNシールドで防がれてしまう。エクシアはGNソードを構え直し、改めて斬りかかる。

咲夜「博麗の巫女、覚悟!!」

霊夢「ツ！」

GNソードの刃がランチャーストライクに迫る。

## 第六話 「紅い館の蒼き能天使」

ランチャーストライクはGNソードからのを避ける素振りは見せなかつた。

コツクピットに座る靈夢は目を閉じていた。衝撃がランチャーストライクを襲う。

・・・

靈夢「・・・ん？」

靈夢は異変に気が付き目を開けた。目の前からガンダムエクシアが消えていた。

GNソードで斬られた痕跡も無かつた。替わりに120mm対艦バルカン砲に「GNビームダガー」が二本刺さっていた。

靈夢「もう使えないわね・・・。」

この状態だと咲夜のエクシアと再戦する事は、火を見るより明らかだつた。

相手は少なからず機動性に優れている。今装着しているのはランチャーストライカー。

エールストライカーは河童達が修理してある頃だろう。機動性はあちらの方が上である。

残されたアグニと「350mmガンランチャー」で相手の速度に着いて行けるだろうか。

靈夢の心は不安に支配されていた。

紅魔館 大広間

紅魔館の大広間には館の主であるレミリアが椅子に座りながら、咲夜から報告を受けていた。

咲夜「確認出来たMSは一機ですが、パチュリ様の図書館で大きな爆発が起きたと考えると、館の中には二機MSがいると思われます。」

レミリア「分かったわ。」

レミリアは右手に持つて、紅いワインの入ったグラスを眺めてい

る。

咲夜「では、私は行つて参ります。」

咲夜は扉の方へ振り返る。

レミリア「待ちなさい、咲夜。」

咲夜「何か？」

咲夜は振り向いて、尚もグラスを眺めるレミリアの顔を見る。  
レミリア「エクシアで出るのなら、アレをドッキングさせて行きな  
さい。」

咲夜「はい。承知しました。」

レミリアの言う「アレ」を咲夜は理解している様だつた。

咲夜が扉から出て行くと、レミリアはワインを近くの小さなテーブ  
ルに置き、座つていた椅子から立ち上がつた。大広間から見える中庭  
をガラス越しに見つめながら、

レミリア「咲夜・・・期待しているわよ。」

そう呟いた。

紅魔館 廊下

靈夢「・・・」

靈夢は無言のままランチャーストライクに、長い廊下を歩かせてい  
た。

しかし、いくら歩こうとも、敵の姿は見えず、同じ風景が続くだけ  
だつた。

その時、

咲夜「待たせたわね。博麗の巫女。」

遙か遠くから十六夜咲夜の声が聞こえて来る。

靈夢「!!」

ランチャーストライクは前方にアグニを照射する。しかし、手応え  
はない。

咲夜「じゃあ、始めましょうか。」

咲夜のその言葉と共に、「GNアームズ TYPE—E」とドッキン  
グしたエクシア、

「GNアーマー」が暗闇の中から姿を現した。

それと同時に靈夢は紫に通信を入れた。

靈夢「紫……」

紫「あ、靈夢？どうしたの？」

靈夢「ソードストライカー、修理終わってる？」

紫「武装を修理するだけだから、終わってるわよ。」

靈夢「スキマ経由で送ってくれる。」

紫「了解。」

スキマが出現して、中から出てきたソードストライカーは、ランチャーストライカーを外したストライクのバツクパツクに装着される。

ストライクは再度ソードストライクに変換された。

GNアームズから左右のGNビームガンが発射される。

ソードストライクはそれをかわし、GNアーマーに向かつてパンツアーアイゼンを発射する。

しかし、パンツアーアイゼンは発生したGNフィールドに弾かれてしまった。

靈夢「ちつ、「

ソードストライクは後ろに周り込もうとして、そのまま、GNアーマーの上を飛行するが、

咲夜「甘い!!」

GNアーマーは右アームの大型GNソードを上空で振る。

靈夢「アツ!!」

ソードストライクの右足の爪先が斬られる。

が、ソードストライクは怯む事なく、GNアーマーの後ろへ回った。  
咲夜「ちつ、「

GNアーマーは回転を始めるが、それを妨害しようとすると同時に、GNフィールドを破壊するため、ソードストライクはシユベルトゲベールをGNフィールドに突き刺す。

靈夢「このつ!!」

GNフィールドは、シユベルトゲベールを中へ通そうとはしなかつ

た。

靈夢「いけえ!!」

シユベルトゲベールを突き出す力が強くなる。

咲夜「・・・」

靈夢「え?」

GNフィールドが消えた。エクシアはもうGNアームズとのドッキングを解除していた。

シユベルトゲベールはGNアームズに突き刺さる。

ソードストライクは急いでシユベルトゲベールを抜き出し、GNアームズとの距離を取る。

数秒後、GNアームズは爆発。廊下に大きな穴が空いた。

靈夢「何のつもりよ!」

咲夜「あなたを爆発に巻き込もうと思つたんだけど、失敗したわね。」

靈夢「えげつない事を考えるのね。」

エクシアはGNソードの刃を展開する。

ソードストライクもそれに答える様に、シユベルトゲベールを構える。

次の瞬間、両機はお互いに向かつてブーストを使い、相手に迫る。

靈夢「このおおおおお!」

咲夜「はあああああ!」

二つの剣がぶつかり合う。

結果、GNソードの刃にはヒビが入り、折れてしまつた。

しかし、エクシアは腰から「GNロングブレイド」・「GNショートブレイド」を取り出す。

そして、言つた。

咲夜「トランザム。」

## 第七話 「次の運命」

「トランザムシステム」が発動して、エクシアの全体が赤く染まつてい  
く。

咲夜「これで終わらせる！」

エクシアはブーストを使って、ソードストライクに急接近する。

靈夢「このっ！」

ソードストライクは、近づいてきたエクシアに向かって、シユベル  
トゲベールを横に薙ぎ払うが、

咲夜「遅い！」

ジャンプであつさりと回避されてしまう。

さらに、右肩のアーマーをGNロングブレイドで切り裂かれてしま  
った。

その後、エクシアは空中でUターンして、今度は左肩のアーマーを  
GNショートブレイドで切り裂く。それは一瞬の出来事だった。

靈夢「速い・・・」

靈夢は「トランザムシステム」に驚愕を示しながらも、エクシアへ  
の攻撃を続けた。

しかし、エクシアは攻撃速度を緩める事はしなかった。それによつ  
て、反撃は愚か、回避も出来ない状況になつていった。

GNショートブレイドで攻撃を受けたら、一秒と待たずに、今度は、  
GNロングブレイドでの攻撃を受ける。これがひたすらにループし  
ていた。

装甲は少しづつ傷ついていった。斬撃数が二十回を超えた所で、つ  
いにソードストライクは倒れた。それと同時にフェイズシフトダウ  
ンを起こした。機体色がメタリックグレーに変わる。

咲夜「終わったわね。」

エクシアはトランザムシステムを解除、その場を立ち去ろうと、倒  
れているソードストライクに背を向けた。

靈夢「まだ・・まだ、終わってないわよ。」

ソードストライクは再び立ち上がった。

咲夜「!?

靈夢「フェイズシフトダウンで気を抜いてるくらいじゃ、私には勝てないわよ!!」

ソードストライクは腰部両脇から、「対装甲コンバットナイフ・アーマーシュナナイダー」を取り出し、エクシアに襲いかかる。

咲夜「！」

エクシアは奇襲とも言える攻撃に対応出来ず、両腕、頭部を一気に切り落とされる。

ついで、アーマーシュナナイダーはエクシアの両脚を切り裂く。唯一残ったエクシアの胴体は床に叩きつけられる。

咲夜「うつ！」

エクシアのコツクピットに衝撃が走った。

靈夢「はあ、はあ、終わつた・・・わね。」

靈夢はコツクピットへの衝撃で、かなり疲労していた為、息切れを起こした様で、背もたれに寄りかかりながら、ひたすらに呼吸を繰り返している。

紫「靈夢、大丈夫？」

何度も目だろうか。紫からの通信が入った。

靈夢「大丈夫じゃないわよ。はあ、このままじゃ・・・はあ、もう戦えないわよ。」

紫「フェイズシフトダウンを起こしたのね。分かったわ。」

床に大きなスキマが出現、ソードストライクを飲み込んでいった。ソードストライクがスキマの中に消えると、スキマも同時に縮んでいった。

紅魔館の廊下には、エクシアの胴体、切り裂かれた頭、腕、脚部だけが残つた。

紅魔館 大広間

妖精メイド「大変です!!」

一匹の妖精メイドが扉から入つてくる。

本来ならM-Sの整備をしている筈だ。

レミリア「どうしたの？」

どうやら、咲夜のエクシアが心配になり、MSの整備途中で通信室に向かつた様だ。

すると、監視カメラには胴体しかないエクシアが映っていたのだと言う。

レミリアはつい数分前までは、使われていなかつた通信室に向かつた。

妖精メイド「エクシアと通信が繋がつてます。」

小さな画面に、コックピットに座る咲夜の姿が映しだされる。

咲夜「お嬢様、すいません。GNアームズを使用したのにも関わらず、エクシアを壊してしまい、敵にも逃げられてしましました。」

レミリアは据え置きの小さなマイクに向かつて喋り始める。

レミリア「いいのよ、咲夜。それより、敵はどこに行つたの。」

咲夜「おそらく、補給の為に一時敵に基地に戻つたのかと。テレビポートをした様なので、時期に戻つて来るかと。」

レミリアは安堵の表情を表した。

レミリア「分かつたわ。今すぐ回収させに行かせるから・・戻つて来なさい。」

レミリアはカメラに向かつて微笑む。

咲夜「・・はい。」

その言葉を最後に通信は終わつた。咲夜はレミリアと同じく微笑んでいた。

レミリアは通信室を出て、MS格納庫へ向かう。

中へ入ると、大勢の妖精メイドが一機のMSの整備をしていた。

レミリア「誰でもいいから、咲夜のエクシアの回収を急いで!!」

レミリアの声と共に數十匹の妖精メイドが超大型トラック、作業用

MS「ドラケンE」数機で格納庫を出て行く。

作業用MSはある程度量産されている様だが、戦闘用MSは量産が間に合つていない様だ。

レミリア「整備の状況はどうなの。」

妖精メイド「万全です。いつでも出せます。」

レミリアは整備が完了した為、大きな黒い布を被っているMSを見つめる。

妖精メイド「出撃ですか？」

レミリア「いいえ、まだよ。でも、いつでも出せる状態にしておきなさい。」

妖精メイド達にそう言いつけると、レミリアは格納庫を出て行つた。

誰一人歩く者の居ない廊下をレミリアは歩いて行く。

レミリア「目覚めの時ね。これも運命なのかしら？エピオン。」

廊下にそう言い残し、レミリアは扉を開け再び大広間に入つた。

## 第八話 「地下牢」

イージスはヴワル魔法図書館から出て、ロビーに上がった。

魔理沙「どつちに進めばいいんだ？」

ロビーにはいくつもの扉、中央には二階に上がる為の階段があった。

迷つてしまふのは無理もないかもしれない。

その時、一つのハッチが開いた。MS用のエスカレーターがあり、そこから地下に行ける様だ。

魔理沙「そつちから歓迎してくれるのか。」

魔理沙は得意気な顔をして、イージスでエスカレーターを下つた。

紅魔郷 大広間

レミリアが椅子に座りくつろいでいる、一匹の妖精メイドが思い切り扉を開け、中に入つて來た。

妖精メイド「作戦、成功しました！」

レミリア「そう、良かつたわ。」

作戦とはつい先程、レミリアが通信室、正確には通信指令室の妖精メイドに命じた、もう一機のMSに対する陽動だつた。

内容は、イージスを地下牢に陽動し、レミリアの実妹「フランドル・スカーレット」に撃破させるという物だつた。

フランドールを地下牢に幽閉してから、レミリアとフランはずつと不仲だつた。

幻想郷に来てから、来るべき自体に備えて、MSをフランドールに渡したが、まだ不仲の状態は続いていた。

その感情をイージスにぶつけさせる事が目的だつた。情緒不安定の為、その様な理由無く襲いかかる可能性もある。

レミリア「さて、どうなるかしら？」

レミリアは笑みを浮かべその状況を楽しんでいた。

にとり「時間のかかる所は後回しにして！すぐに修理出来る所から手を付けて!!」

MSの製造、修理を行う河童のアジトには、メカマンの河童たちを指揮する「河城にとり」の姿があった。

紫「ねえ。ストライクの件なんだけど・・・」

八雲紫が後ろからにとりに話しかける。どうやら、ストライクの件で話がある様だ。

にとり「ああ、ストライクは予備パーツが多かつたから、順調に作業が進んでるよ。」

紫「ストライクの事なんだけど、格納庫から「マルチプルアサルトストライカー」を持つてくれる？」

この紫の発言ににとりは驚きを見せた。

にとり「アレを使うの？でも、機動性が落ちるって言つたのは紫じゃ・・・」

紫「いいの。持つてきてストライクに装着させて。」

にとりは「仕方ないな。」そう言いたそうな顔で、紫の目を見つめながら、

にとり「分かった。そうするよ。」

にとりは近くにあつた移動用のリニアカーを利用して、格納庫へ向かつて行つた。

マルチプルアサルトストライカーとは、エール、ソード、ランチャードの3種の装備を統合したストライカーであり、装着した状態のストライクを「GAT-X105+AQM/E-YM-1 パーフェクトストライクガンダム」と呼ぶ。

様々な戦況に対応できる装備だが、多機能ゆえの使い勝手の悪さと、軽装時のストライクの約2倍も自重が機動性を悪くする。という欠点もあつた。

それを見越して紫はマルチプルアサルトストライカーを、ストライクに使用させなかつた。だが、紅魔館のMSの性能に対応する為、使用に踏み込んだのだ。

靈夢「うん。」

別室で休息を取っていた靈夢が戻つて來た。

紫「どう? 疲れは取れた?」

靈夢「微妙ね。騒音が酷くて眠れなかつたわ。」

紫「仕方ないじやない。MSの修理をしているんだもの。」

靈夢は不機嫌そうな顔でストライクの方へ向かつて行く。

紫もそれに続く。

靈夢「あと、どれくらいで終わるの?」

紫「數十分。機体自体は予備パーツが多かつたから、すんなり終わるそうよ。」

靈夢と紫はストライクを下から眺める。

靈夢「じやあ、その數十分は何よ。」

紫「ストライカーの装着よ。」

靈夢「そんなにかかるの?」

紫「新型で大型なの。」

靈夢は呆れた様に溜息をつき、上方に設置してある足場へ飛んでいった。

ストライクを正面から眺められる高さにある為、手すりに頬杖をついて、靈夢はストライクを眺めていた。

紫「どうかしたの?」

靈夢の後ろに、スキマから出てきた紫が現れる。

靈夢「何か、嫌な予感がするのよ。」

紫「そう・・。」

紅魔館 ヴワル魔法図書館

パチュリ「う・・・。」

ヴァーチェのコツクピットで氣絶していたパチュリが、目を覚ました。

パチュリーはコツクピットから出る。

近くには倒れるビギナ・ギナ、氣絶している小悪魔の姿があつた。

パチュリー「まつたく。」

小悪魔に対しては呆れたご様子だが、イージスが図書館を出て行き、ほつとするパチュリーであつた。

パチュリー「あのMSはどこへ行つたのかしら。」

パチュリーは近くの無線機を利用し、レミリアと連絡を取つた。いつもと変わらないレミリアの声が聞こえてくる。

レミリア「パチエ、どうしたの？」

パチュリー「図書館に来たMSを知らない？」

パチュリーの質問に対し、レミリアは少し間を置いてから話し始めた。

レミリア「その事なら心配ないわ。MSは地下牢へ向かわせたわ。」

パチュリー「地下牢？」

地下牢にはレミリアの妹、フランドールが幽閉されている事は、パチュリーも勿論知っていた。

だからこそレミリアの行為に疑問を憶えた。

## 第九話 「精靈と反逆の翼」

レミリア「どうかした？」

パチュリィ「いいえ、ありがとうございます。」

パチュリィはレミリアとの無線を切つて、ヴァーチエの方を見る。ヴァーチエの外装は衝撃によつて少し外れた様で、中の隠されたMSの姿が垣間見えていた。

パチュリィ「行くわよ、ヴァーチエ。いえ、ナドレ。」

紅魔館 地下牢

イージスはエスカレーターを下りきつた。

降りた先には厳重に閉じられたハッチがあつた。下の方には小さな扉もあつた。人間用だろうか。

とにかく、ハッチを開ける為のスイッチを探すが、見当たらなかつた。

もしかしたら、これは開閉用のハッチでは無いのかも知れない。何かを封じ込める為のハッチなのかも知れない。

そう考えると魔理沙は黙つていられなかつた。

魔理沙「しようがない。ここは！」

ハッチの先に価値のある物があると考えた魔理沙は、イージスをMAの形態に変形させて、スキュラを照射させる準備をした。

パチュリィ「待ちなさい!!」

しかし、背後からMSが出現した為、スキュラの照射を中止した。

魔理沙「あれは・・・。」

振り向くと、一機の白いMGN-004「ガンダムナドレ」がライフルとシールドを持つて立つていた。

そのフォルムと髪の毛に似た紅いGN粒子供給コードは、機体の印象を女性に彷彿させる。

パチュリィ「直ちに館から出て行きなさい。」

魔理沙「そいつは出来ないな。」

パチュリィ「これは警告ではないわ。命令よ。」

パチュリィは何かを伝えたそうに叫ぶ。

しかし、魔理沙の意思を変える事は出来なかつた。

魔理沙「悪いが・・落とすぜ！」

イージスは両腕、両脚、全てのビームサーベルを出現させて、ナドレに襲いかかる。

パチュリィ「・・・なら。」

ナドレもビームサーベルを取り出し、イージスに斬りかかる。

二つの刃が交わり、激しく火花を散らす。

魔理沙「このつ！」

イージスは右脚を振り上げるが、ナドレは回避する。

続いて、イージスはビームライフルをナドレに発射するが、シールドで防がれる。

ナドレもビームライフルを発射し、反撃する。

イージスはそれをナドレと同じく、シールドで防ぐ。

パチュリィ「このつ。」

ナドレはビームライフルを連射するが、ほとんどをイージスは回避、防御した。

魔理沙「その程度の火力じゃ!!」

イージスはナドレに接近し、右腕のビームサーベルで頭部を吹き飛ばした。

パチュリィ「まだ！」  
ナドレは前方にビームサーベルを振り払う。  
その攻撃はイージスのシールドの上半分を切断した。

魔理沙「まだだ！」

イージスは素早い動きで、ナドレの右腕、持っていたビームライフルを切り裂く。

そして、シールドの先端部を胴体に突き刺した。

パチュリィ「ううっ！」

突き刺したシールドが貫通し、パチュリィを乗せた脱出ポッドがコックピットから射出され、ナドレは爆散した。

魔理沙「くつ！」

少なからずその衝撃はイージスにも届いた様である。右のアンテナが吹き飛んだ。

魔理沙「じゃあ、私は先に進むぜ。」

イージスはナドレの残骸に背を向けると、ハツチに向かつて歩いて行つた。

紅魔館 地下牢（内部）

フラン「何？今の音？」

ナドレが爆発した時の音と衝撃は、地下牢の内部まで届いていた。人形遊びをしていたフランは手を止め、ハツチの方へ走つて行き、耳を当てる。

フラン「M S？」

フランの耳にはイージスの歩く音が聞こえた。

フラン「ふふ♪ M Sだ！」

フランは嬉しさのあまり飛びはね、空中を飛び回る。その美しい翼が空中に揺れる。

フラン「ふふ、お出迎えしなきや！」

満面の笑みを浮かべ、姉レミリアから与えられたM S X X X G

0 1 W 「ウイングガンダム（E W版）」に乗り込む。

ウイングガンダムのトリコロールカラーの翼は、フラン本人の翼と同じく、美しい物だつた。

右手には機体の慎重並に長大な携帯ビーム砲「バスターライフル」を装備していて、

カートリッジは予備も含めると合計九つ。

バスターライフルは、半径150mに強烈なプラズマ過流を引き起こす程の威力を持つてているライフルであり、絶大な火力を持つた武装と言える。

これ程のMSのを何故、レミリアはフランに与えたのだろうか。常人であれば自分の搭乗機にする所を、情緒不安定な妹に与えたのどうか。

フランの性格とウイングガンダムの火力を考えれば、紅魔館などす

ぐ吹き飛んでしまうだろう。レミリアとフランが不仲なら、尚更危険だ。

それとも、レミリアにしか分からない意図があるのだろうか。謎とそれに対する疑問だけが残る。

そんな事など考えてもいなかつたフランは、姉からMSを与えられた事を素直に喜ぶのだつた。

しかし、それだけでは不仲の状態は解消しなかつた様だ。

紅魔館 地下牢（外部）

魔理沙「ここを何とか開けないとな。」

ハツチをビームサーベルで切り裂いてみるが、特殊な合金で出来ている様だ、びくともしない。

魔理沙「ううん。」

魔理沙が頭を捻り、悩んでいると、一本のビーム砲が内側から飛び出した。

ハツチには一つの丸い穴が空いた。

魔理沙「何だ!?」

## 第十話 「エピオン、出撃」

ビーム砲は幸いにもイージスには当たらなかつたが、壁に激突した為大きな衝撃が周囲に走る。

魔理沙「うつ！」

ビーム砲によつて空いた穴からは、地下牢とは思えない綺麗で豪華な部屋が見えた。人形、ぬいぐるみ、ベッドなど、幼い少女の生活部屋をイメージさせる物ばかりが置いてあつた。

魔理沙「何なんだよ！」

イージスは穴を通り抜け、地下牢の中に入る。

フラン「ふふふ、いらっしゃい。」

フランは目を輝かせ、笑みを浮かべてコツクピットからイージスを見つめていた。

魔理沙「な、何だよ・・・。」

フランの言葉に魔理沙は困惑を隠せなかつた。

とにかく危険な雰囲気を、魔理沙はフランから感じていた。

フラン「・・・どうしたの？」

何の反応も無く、動きを見せないイージスに対して疑問を感じた様だ。

魔理沙「そ、それはこっちのセリフだ！」

イージスは腕を右から左へ振り払う。

魔理沙「だいたい何だよここ、あいつらの親玉がいるかと思つて来たのによ・・・。」

お前は違うみたいだし、お宝も無いし・・・。」

魔理沙の内に秘めていた本音が口からどんどん飛び出した。

フランはイージスから聞こえて来る魔理沙の声を聞いて、黙つているだけだつた。

魔理沙「だいたい誰だよ、お前は。」

フラン「私は・・・フランドール・スカーレット。ずっとここに閉じ込められるの。」

魔理沙「あ〜？」

普通のそれとは違う自己紹介を受けて魔理沙は苛立ちと、本日二度目の困惑を感じだ。

面倒くさくなりそうだ。

魔理沙は心の底からそう思つた。

フラン「だから・・私、ずっと暇だつたの。だから、私と遊んで!!」

魔理沙「あー！つたく!!」

ウイングはイージスに急接近する。イージスはブーストジャーンプで回避しようとするが、マニピュレーターで足を捕まってしまう。

フラン「捕まえた！」

魔理沙「この！」

ビームライフルをウイングの頭部へ向けて発射するが、標準はわずかに逸れ、アンテナに命中する。

魔理沙「これで似た者同士だ！」

フラン「ふふ、お揃い！」

ウイングはバスターライフルを左手に持ち替え、右腕でシールド裏のビームサーベルを抜刀する。

フラン「それ!!」

ウイングはビームサーベルを足に向かつて振るが、イージスが脚部のビームサーベルを出現させた事で、攻撃は無効化された。

魔理沙「当たれ！」

イージスは脚を振り上げるがウイングに回避される。しかも、右足の先端部を「肩部マシンキヤノン」で破壊された。

フラン「えい！」

ウイングはバスターライフルを発射する。

イージスはそれを避けるが、地下牢の壁を貫いた。  
ザツパーン

壁に出来た穴から大量に水が流れこむ。

フラン「何!?」

魔理沙「忘れてた！この館、周りは湖か！」

物凄い量の水が流れ込み、地下牢の半分近くが浸水していた。

魔理沙「外に出るしかないか！」

フランのウイングと魔理沙のイージスの戦闘の場は、地下牢から紅魔館周辺の湖に変わろうとしていた。

### 紅魔館 上空

靈夢「この館の主を出しなさい！」

先程まで静かだった紅魔館の上空に、靈夢の駆るパーエクツストライクが現れた。

### 紅魔館 通信指令室

レミリア「何事なの？」

妖精メイド「モ、MSがこの館の上空に現れました！」

レミリア「どうやら、私に出てきて欲しい様ね。」

レミリアは通信指令室を出ようとすると。

妖精メイド「どうされるのですか!?」

レミリア「エピオンで出るわ。」

レミリアは直ちに格納庫へ向かつた。

妖精メイド「MSですか!?」

レミリア「そうよ。エピオンを出すわ。」

妖精メイド達によつてエピオンに被さつていた布は取られ、その姿が現れた。

レミリアはコックピットのハッチを開け、エピオンに乗り込む。格納庫の天井が左右にスライドし、デュアルアイが光つたエピオンはそこから出撃した。

エピオンはMA形態に変形してから、パーエクトストライクの元へ向かつた。

靈夢「どうとう來たわね。」

靈夢は向かつてくるMA形態のエピオンを視認した。

レミリア「あれか。」

それと同時にレミリアもパーエクトストライクを視認した。

エピオンはMS形態に戻り、パーエクトストライクの前に立ちはだかる。

レミリア「咲夜や門番と交戦した機体ね。何の用かしら?」

靈夢「メイドにも言つたけど、この紅い霧迷惑なのよ。やめてくれる。」

レミリア「それは出来ないわ。」

エピオンとパーエクトストライクは空中で睨み合う様に、デュアルアイを光らせていた。

靈夢「やっぱりそうなのね。じゃあ、倒すだけよ!」

パーエクトストライクはシユベルトゲベールを、威嚇するに軽く振り回す。

レミリア「そう、それなら・・・。」

エピオンも腰から「ビームソード」の柄を取り出し、ビーム刀を出現させて、胸の前で構える。

レミリア「私もあなたを倒すだけよ。」

エピオンはパーエクトストライクに向かつて行く。

靈夢「いくわよ!」

パーエクトストライクも同じくエピオンに向かつて行く。

レミリア「はあっ!」

靈夢「このつ!」

シユベルトゲベールとビームソードがぶつかり合う。

## 第十一話「紅い空での決闘」

レミリア「いけつ！」

エピオンは「ヒートロッド」でシユベルトゲベールを破壊しようとすると、パーエクトストライクはいち早く後退した。

靈夢「このつ！」

パーエクトストライクはマイダスマツサーを、ヒートロッドに向けて投擲するが、弾かれてしまう。

弾かれたマイダスマツサーは、パーエクトストライクに向かつて行く。

靈夢「よくも!!」

パーエクトストライクはシユベルトゲベールで、マイダスマツサーをエピオンの方へ跳ね返す。

レミリア「落ちなさい。」

エピオンはヒートロッドで、マイダスマツサーを地面へ叩き落とす。

マイダスマツサーは紅魔館の中庭の地面に刺さった。

直後にパーエクトストライクは、アグニをエピオンへ発射する。

レミリア「甘い。」

エピオンはビームを回避、パーエクトストライクへ急接近する。

靈夢「！」

ビームソードがパーエクトストライクの頭部に迫る。  
しかし、パーエクトストライクはそれを避ける。

レミリア「すばしつこいMSめ！」

今度はヒートロッドがパーエクトストライクの頭部を狙う。  
しかし、それも避けられる。

靈夢「今度はこつちの番よ！」

パーエクトストライクのは20mm対艦バルカン砲を、エピオンに向かつて連射する。

それと同時に「350mmガンランチャ一」もエピオンに発射される。

レミリア「そんな攻撃で！」

エピオンは誘導弾であるガンランチャーを回避しながら、ビームソードで切り裂く。

靈夢「落ちなさい！」

パーエクトストライクは、対艦バルカン砲を発射しながら、エピオンに向かってアグニを照射した。

エピオンは華麗な動きで対艦バルカン砲、アグニのビーム砲を回避した。

エピオンは再度パーエクトストライクに接近する。

今度はヒートロッドが、シユベルトゲベールの刃を破壊しようと放たれる。

パーエクトストライクはシユベルトゲベールでヒートロッドを弾く。

しかし、エピオンは怯む事なく、ビームソードをパーエクトストライクへ突き出し、突進していくた。

靈夢「まだまだ！」

パーエクトストライクは左へ回避運動を行うが、パンツァーハイゼンがビームソードで破壊される。

靈夢「ちつ、でも！」

真近くにいるエピオンに向かって、シユベルトゲベールを振り払う。

しかし、エピオンはその程度の攻撃で撃破されるMSでは無かつた、ましてやレミリアもその程度で搭乗機を撃破されるパイロットではなかつた。

レミリア「その程度の攻撃でエピオンは落ちないわ。」

エピオンはビームソードを構え直し、パーエクトストライクに向かって行く。

パーエクトストライクもシユベルトゲベールを構え直し、エピオンに向かって行く。

靈夢「沈めえええええ！」

レミリア「落ちなさい!!」

再びシュベルトゲベールとビームソードが激しくぶつかる。火花を散らせ、ビーム刃同士が交わる。お互いは徐々に力を入れていき、剣を押し合う。

一度離れたと思ったら、またぶつかり合う。それを何回も空中で繰り返す。

靈夢「はあ、はあ。」

レミリア「はあ、はあ。」

お互いのパイロットは疲労した姿を見せる。

しかし、パーエクトストライクはシュベルトゲベールを構え、エピオンに向かつて行く。

エピオンもビームソードを構え、パーエクトストライクに向かつて行く。

靈夢「これで・・何もかも終わりよ！」

レミリア「これで・・終わらせる！」

シュベルトゲベールとビームソードがぶつかり、今度は大きなスパークが発生する。

靈夢「きやつ！」

レミリア「うつ！」

パーエクトストライクとエピオンは、お互いに距離を取る。

靈夢「言つてなかつたけど、私がこの勝負に勝つたらあの紅い霧、やめてもらわうわよ。」

レミリア「分かってるわよ。まあ、私には勝てないけどね。」

靈夢「やつぱり。そう言うと思つたわ。」

パーエクトストライクはエピオンに向かつて行く。

エピオンはそれに応える様にビームソードを構える。

また、格闘戦が始まるのだとレミリアは考えていた。

しかし、パーエクトストライクはシュベルトゲベールを投擲した。

レミリア「!?」

レミリアは驚きながらも、シュベルトゲベールを回避するが、右足の爪先を僅かに破壊される。

靈夢「ふ、そんなんじゃ私には勝てないわよ！」

レミリア「…そうかもしれないわね…でも、私は負ける訳にはいかない!!」

エピオンのコックピットにキーボードが出現する。

レミリアはキーを4回、「Z」「E」「R」「O」を押した。

モニターにはコード「ZERO」を示す文字が現れる。それは「ゼロシステム」の発動を表すものだつた。

ピピピピピピという音と共にゼロシステムが始動する。

レミリア「私は…勝利を掴みたいの。教えて、ゼロ。勝つ為にはどうすればいい、の？」

レミリアはそう呟いた。

靈夢「あら、どうしたの？怖気付いたのかしら？」

靈夢は自信に満ちた顔で、動きを止めているエピオンに向かつて言い放つた。

レミリア「始めるわよ、ゼロとエピオンの紅きショーケースを。」

## 第十一話 「紅の終焉」

「ゼロシステム」は、勝利するためには取るべき行動をあらかじめパイロットに見せる機構を持っている。

しかし、犠牲もいとわない攻撃など、非人間的な選択が強要されることもある。

レミリアはゼロシステムに耐える事が出来るのだろうか。

レミリア「もう終わりよ。博麗の巫女、落とす。」

エピオンの持つビームソードの刃は巨大化、最大出力状態に変化した。

そのままパーエクトストライクに突っ込んで行く。

靈夢「な、何よあれ!!」

靈夢はビームソードの姿に驚愕しながらも、横に振り払われたビームソードをパーエクトストライクは回避してみせた。

対艦バルカン砲にが破壊される。

靈夢「ただ大きいだけじゃない！取り回しは悪いみたいね!!」

パーエクトストライクはビームサーベルを取り出し、エピオンを後ろから斬る。

しかし、撃破までは行かず、左足を膝まで切断して終わつた。

レミリア「よくも！」

エピオンはビームソードを突き出す形で構え、パーエクトストライクに向かつて行く。

靈夢「そっちから来るなら!!」

パーエクトストライクはアグニを構える。

アグニは、真正面から向かつて来る愚かなエピオンを、照射によつて爆発させた。

レミリア「ううあつ!!」

しかし、それはゼロシステムが見せた幻であつた。  
直ちにエピオンは横へ移動した。

すると、ゼロシステムが見せた通り、パーフェクトストライクはアグニを照射した。

レミリア「はあ・・はあ。」

レミリアはゼロシステムに脅威しながらも、ビームソードをサイドパーフェクトストライクに向けた。

紅魔館 周辺の湖

魔理沙「くつそお！」

イージスは湖の中から出てきた。

数秒後、ウイングもバスターライフルを発射しながら、同じように湖の中から出てきた。

イージスはそれを回避、ビームサーベルによる格闘戦に持ち込もうとウイングに急接近するが、マシンキャノンの発射によって、退避した。

魔理沙「(こ)のままじや近づけない!!」

ウイングはまたもバスターライフルを発射する。

フラン「これで終わり?」

ウイングはバスターライフルに、新たな三つのカートリッジを装着しようとした。

魔理沙「今だ!!」

フラン「何!？」

イージスは右腕に装着されている、三つの予備カートリッジをビームサーベルで切断した。

ウイングは爆発を回避する為、吹く風の如く、その場を離れた。

ウイングのカートリッジを破壊出来たのはいいが、カートリッジの爆発によって、ウイングの姿は見えなくなり、ウイングにカートリッジを脱着させる時間を与えてしまった。

魔理沙「こうなりや!!」

イージスはウイングに突撃していく。

フラン「この!」

イージスはバスターライフルから放たれたビーム砲を回避した。

しかし、直ぐに二発目が発射される。

それも回避したイージスはビームライフルを発射、バスターライフルの破壊に成功する。

魔理沙「よつしやあ！今度はこつちの番だぜ!!」

イージスは変形して、スキュラを発射する。

しかし、エネルギー不足によつて、発射は不可能だつた。

魔理沙「何!?」

イージスはウイングを捕縛する。

そして・・・

魔理沙「ふつ、まさかこうなるとはな。」

イージスはウイングを巻き込む形で自爆、爆散した。

紅魔館 上空

靈夢「この!!」

パーエクトストライクはビームサーベルで、ビームソードに対応しようとすると、勿論威力と出力に差がある為、簡単に弾き返される。

靈夢「これならどう？」

パーエクトストライクは俊敏にビームサーベルを投擲した。

ビームサーベルはエピオンの胴体部に突き刺さり、爆散した。  
エピオンの残骸は落下、紅魔館の屋根を壊していく。

レミリア「うぐ・・う！」

またも、レミリアの見たその光景はゼロシステムによる幻だつた。

ビームサーベルを回避する。

少々精神的に嫌気が指していたレミリアだが、戦闘を続行した。

レミリア「こうなつたら！」

エピオンはパーエクトストライクに急接近、パーエクトストライクを紅魔館の屋根に突き落とした。

靈夢「ちよつと！何やつてんのよ!!」

ゼロシステムによつて、レミリアは少し錯乱している様だ。  
苦しんでいる様にも見える。

パーエクトストライクはエピオンを突き飛ばし、空中に上がった。

エピオンも同じく、空中に舞い上がる。

靈夢「これで終わらせるわよ!!」

レミリア「これで博麗の巫女、あなたを落とすわ!!」

エピオンはビームソード、パーエクトストライクはビームサーベルを構え、お互いに突進する。

お互いがお互いを通り抜け、両者の間に沈黙が訪れる。

次の瞬間、パーエクトストライクは頭部、右腕が落ちていった。エピオンは頭部、右腕、右脚を、ビームサーベルによる連続攻撃で斬られていた。

取り回しにおいてビームサーベルよりも、ビームソードが勝つたのだと言える。

エピオンは墜落。

パーエクトストライクは勝利、紅霧異変は無事解決したと言える。

また、幻想郷に平和が帰つてくるのだ。

靈夢はコックピットで安堵の表情をした。

## 妖々夢編

### 第十二話「春の吹雪」

紅霧異変が解決されてから数週間。

紅魔館の人物と靈夢達による、仲直り（？）の宴会も行われ、両者の関係は良くなっていた。

フランドールも外出する事を許され、スカーレット姉妹の関係も良い状態に戻った。

それよりも魔理沙はイージスを自爆させたのに、ウイングにはほとんど傷が無かつた事に驚いていた。

フランが気絶した為、偶然勝利出来たと言える。

イージスの代わりとなる魔理沙のMSも、順調に開発が進んでいた。靈夢のストライクに代わるMSも、まだ相当な時間はかかるとされていたが、開発は進んでいた。

それから時は経ち、紅霧異変の解決から数ヶ月。

幻想郷は春の時期になつても冬が長引き、5月になつたにもかかわらず冬のように雪が降り続けた。

靈夢、魔理沙、そして咲夜達にはそれが、異変であると分かつた。各自は異変解決が必要と考え、MSを欲するのであつた。

#### 河童のアジト

魔理沙は箒を使い、大急ぎで空を飛び、河童のアジトに付くと、走つてにとりの元に向かつた。

魔理沙「異変だ、異変!!」

にとり「あ、魔理沙もそう思う？」

魔理沙「そう思う？じやねえよ!! MSは出せるのか!?」

魔理沙はやけに異変に対して向きになつている。

にとり「うん。魔理沙のは靈夢のより先に出来上がつてるよ。」

魔理沙「そうか！直ぐに出してくれ！」

魔理沙は目を光らせてにとりを見つめた。

新しいMSに興味を示しているのか。

はたまた靈夢より、一足先に異変解決に向かえる事を喜んでいるのか。

か。

それとも両方か。それは不明である。

にとりの手によつて、魔理沙の為にイージスに代わつて開発された  
ガンダムタイプMS、ZGMF-X09A「ジャステイスガンダム」が  
格納庫からMSデッキに移動された。

魔理沙「おお！」

ジャステイスを見た魔理沙は瞳を輝かせ、腕を挙げて喜んでいた。  
相当機体を気に入つたのだろう。

にとり「ジャステイスだよ。今すぐ出るの？」

魔理沙「ジャステイスか・・・よし、出る。」

にとりは魔理沙の言葉を聞くと、出撃の為の準備をし始めた。

魔理沙もジャステイスの近くまで移動し、コックピットの中に入つた。

シートに座つた魔理沙はハッチを閉め、レバー、各種スイッチの確認をし始めた。

にとり「イージスと基本的な操作は同じだけど、武装とかの扱いについては、少し違うから気を付けてね。」

魔理沙「じゃあ、その操作方法を教えるよ。」

にとり「コックピットの近くに軽い説明書があるから、それを参考にしてよ。」

ジャステイスがカタパルトに移動した。

にとり「よし、出せるよ。」

ジャステイスは脚と腕を曲げ、姿勢を取る。

魔理紗は「オホン」と小さく咳をしてから、次のように言つた。

魔理紗「霧雨魔理紗、ジャステイス出るぞ。」

ジャステイスはカタパルトから射出され、春なのに雪の降る午後の空に飛んでいった。

紫「本当に西行妖を・・・咲かせるのね？」

幽々子「ええ、そのつもりよ。」

力を蓄え続ける西行妖の下に、八雲紫と「西行寺幽々子」はいた。西行寺幽々子と八雲紫は旧友の仲であつた。それがこの異変にどう影響するのか。

それは現時点では誰にも分からなかつた。

周囲では雪がちらつくだけだが、そこは違かつた。吹雪がガンダムエクシアの装甲を叩きつける。

もつとも、エクシアには何の損害もないが。

コツクピットには紅魔館のメイド十六夜咲夜の姿があつた。

彼女も春なのに雪が降るという事を異変とみなし、行動に出たのだ。

エクシアはゆっくりと吹雪の中を前進する。コツクピットにいる

咲夜は首にマフラーも巻いていて、どこか冷めた顔している。

吹雪が一層強くなる。

エクシアの前にヴィクトリーガンダムの姿が現れる。

咲夜「あら、その機体は湖の妖精達かしら。」

咲夜は表情を元に戻し、ヴィクトリーガンダムを確認する。

チルノ「ここから先には行かせないぞ！」

咲夜「あら、面倒くさそうなのが出てきたわね。」

エクシアはGNソードを構える。

ヴィクトリーもビームライフルを構える。

エクシアは瞬時に動きだし、ヴィクトリーに迫る。

ヴィクトリーのライフルからビームが放たれる。

エクシアは滑らかな動きでそれを回避、ヴィクトリーの左腕を切り落とす。

チルノ「甘いんだよ！」

ヴィクトリーはビームライフルの銃口を、着地したエクシアの頭部に向ける。

チルノ「降伏しろ！」

咲夜「あら、甘いのはどちらかしら？」

エクシアは脚を回し、ヴィクトリーは転倒する。ビームライフルを発射するが、当たる筈もない。

咲夜「呆氣無いわね。」

エクシアはヴィクトリーの背後から、GNソードで胸部を貫く。僅かにコツクピットの上にずれていた。

チルノ「うわあ！」

ヴィクトリーは二度目の墜落の時を迎えた。  
脱出ポッドが放たれ、ヴィクトリーは爆散、落ちた残骸は数十秒後に消滅した。

しかし、咲夜に安心する事は許されなかつた。

もう、背後にはLM312V06「Vガンダムヘキサ」の姿があつたのだ。

咲夜「もう一機いたのね。」  
次の戦いが始まる。

## 第十四話 「猫と虎」

河童のアジト

魔理紗がジャステイスで出て数十分後、靈夢は河童のアジトに付いた。

にとり「やあ、遅かつたね。」

靈夢「まあね。」

にとり「機体の準備なら出来てるよ。」

靈夢はにとりと共に奥に進んでいく。

すると、目の前にスキマが現れ、中から八雲紫が出てきた。

靈夢「あら、紫じやない。冬眠してると思つたわ。」

紫「異変なんでしょう。寝ていられる訳がないじゃない。」

「それもそうね。」と呟くと靈夢はさらに奥に進んでいった。

開発途中の二機のMSを見つめる。どちらもまだ、脚部までフレームを付けただけの状態だった。

靈夢「で、私のMSはどれ？ストライクはもう使えないから、新型でしょ？」

靈夢の問いに紫が答える。

紫「残念だけど、あなたの新型は開発中よ。悪いけどあなたにはまだストライク系列を使つて貰うわよ。」

靈夢「え！じゃあ、魔理紗のもイージス系列なの？」

自分の搭乗機が新型のMSではない事を聞くと、靈夢は慌てだした。

そこで、魔理紗も同じなのかと問い合わせた。

紫「魔理紗のは新型よ。イージスは派生開発が出来ない程の損害だつたから、開発を急ぐ必要があつたの。」

靈夢「間に合わなかつたつて事？つたく・・だいたいストライク系列でしょ？とても期待出来ないわ。」

靈夢は呆れた表情で、手を何度も横に振つた。

にとり「心配しないで、オリジナルのストライクより性能は上がつてるから。」

靈夢「・・・そう。」

ため息を付くと靈夢はにとりと、新たな搭乗機MBF—02「ストライクルージュ」の元へ向かつた。

靈夢はコックピットに入り、シートに座る。

靈夢「ストライクと操作は同じ?」

にとり「その通り。エールストライクと同じ感覚でOKだよ。」

靈夢「機体名は?」

にとり「ストライクルージュ。」

それを聞くと、靈夢はストライクルージュをカタパルトに移動させた。

靈夢「博麗靈夢、ルージュ出るわよ!」

ストライクルージュはジヤステイスと同じ様に、幻想郷の雪が舞い散る大空へ、飛んでいった。

紫は開発中の二機と、格納庫へ運ばれようとしている白いMSを見つめた。

咲夜「はあっ！」

エクシアはヘキサの頭部をはねるが如く、後ろからGNソードを振り払う。

しかし、GNソードにビームサーベルが衝突する。

エクシアは怯む事なく、ヘキサの両肩へGNビームダガーを投擲する。

衝撃で怯んだヘキサに対し、再度頭部へGNソードを振り払うが、破壊出来たのは片方のアンテナだけだった。

咲夜「しぶといのね。あなたがこの吹雪の黒幕なんでしょう？」

レティ「そうよ。でも、やられる訳にはいかないでしょ？」

パイロットの「レティ・ホワイトロック」は小さく微笑む。

ヘキサはエクシアに接近、ビームサーベルを振り払うが、しゃがんで回避された。

エクシアはその隙を付き、GNソードでヘキサの胴体を真つ二つにした。

ヴィクトリーガンダムの時と同じく、コックピットは狙つていな  
い。

レティを乗せた脱出ポッドは無事、射出された。

咲夜「弱い黒幕だつたわね。ねえ、エクシア。」

エクシアは先へと進んでいった。

目指すは異変の主犯の退治だ。

マヨヒガ

魔理紗「ん？こんな所に家なんかあつたか？」

ファトウム００に乗つた状態で、飛行を続けていたジャステイスだが、その家が気になり、地上に降りた。

魔理紗「古い家だな。鼠や猫が出そうな感じだが。」

魔理紗がそう言うと狙つたかの様に、吹雪の中から四足歩行のMS TMF／A－803「ラゴウ」が現れた。

魔理紗「噂をすれば影か。」

橙「何の用？」

コックピットには、後席に座る化け猫「橙」の姿があつた。

魔理紗「特に用は無いな。」

橙「ここに来たつて事は、迷つたんでしょ？」

魔理紗「う、うるさいぞ。」

橙「帰り道も分からんいでしょ？」

魔理紗「少し、黙つて貰うぞ。」

ジャステイスは「ラケルタビームサーベル」を二本取り出し、柄同士を連結、「アンビデクストラス・ハルバード」と呼ばれる双刃の薙刀にした。

それを構えラゴウに接近する。

橙「もうう。」

前席にガンナーのいない橙のラゴウは不利だったが、戦闘を開始した。

ラゴウは口に咥えている「2連装ビームサーベル」の刃を出現させて、ジャステイスに接近していった。

ジャステイスはジャンプでラゴウのビームサーベルを回避、上から斬りつけようとするが、その間もなくラゴウは通り過ぎていった。

澄「このお！」

ラゴウはUターンして、再びジャステイスに接近する。

またもジャステイスはジャンプで攻撃を回避、一回目と同様に上から斬りつけようとするが、ラゴウは通りすぎる。

魔理紗「こうなつたら！」

ジャステイスはUターンしようとする、ラゴウに向かつてアンビデクストラス・ハルバードを投擲した。

澄「うわあ！」

後ろ足を二本、切断された。

魔理紗「これがジャステイスの力だ！」

ラゴウはとぼとぼと、撤退していく。

魔理紗「よし、先に進むか。」

異変解決の為、ジャステイスはファトウム00に乗った状態で吹雪の中、先に進んだ。

## 第十五話 「操られし誘導弾」

吹雪の中をストライクルージュは、飛行する。

すると、一つの洋館が見えた。

靈夢「ここら辺は魔法の森よね。」

吹雪のでそれも確認出来ない状況で、靈夢は情報収集の為ストライクルージュを洋館の近くに着地した。

視界も夜+吹雪で悪い。体制を立て直す為の着地でもあつた。

アリス「何？騒がしいわね。」

洋館の中から金髪の人形の様な少女「アリス・マーガトロイド」が、目を半分開いた状態で出てきた。

明らかに「面倒くさそう。」と言いたそうな顔だつた。

靈夢はそんな事を気にせず、コックピットから顔を出す。

靈夢「外は冷えるわね。所でこの異変について何か知らない？」

アリス「春を集めてる奴がいるのよ。」

靈夢「春を集めれる？」

アリス「そうよ。」

靈夢は頭を傾げる。

しかし、ここは幻想郷だ。そういう事が有り得る場所なのだ。

靈夢「（そういえば紫が・・・。）

靈夢は出撃後、紫に通信で言われた事を思い出した。

紫『春の力が薄まつていてる様なの。とにかくそれだけは知つておいて。冥界へ行けば何か分かるかもね。』

靈夢はそこで冥界へ行くにしたのだ。

実は後に魔理紗にも、エクシアの整備を受けた咲夜にも、同じ内容の通信を入れる紫であつた。

靈夢「そうなの。詳しく述べたわ。それじゃあ。」

アリス「ちょっと、人の家の近くに勝手にMSを着地させてそれだけなの？」

靈夢「別にいいじゃない。」

そこで靈夢は洋館の裏にネットのかけられた、MSのがある事に気

が付いた。

靈夢「あら、そういう事なの。」

アリス「そう、その通りよ。私も情報収集の為に。」

アリスは異変の事について教えたから、替わりにMSの情報、データを取りたいらしい。

靈夢「別にいいけど。容赦しないわよ。」

アリスはMSのコックピットに向かった。

そのMS、XXXG-01H「ガンダムヘビーアームズ」は立ち上がり、ネットをよける。

靈夢「いくわよ。」

ストライクルージュはビームサーベルを取り出し、ヘビーアームズに向かっていく。

アリス「迂闊に近づかない方がいいわよ。」

ヘビーアームズはストライクルージュへ、「ビームガトリング」を連射する。

ストライクルージュはそれを回避、近くの木々に隠れた。

アリス「それじゃあ、良い的よ。」

ヘビーアームズは両肩アーマーから「ホーミングミサイル」を6発発射した。

ストライクルージュはそれをビームライフルで破壊、空中で爆発させていく。

残りの三発はビームサーベルで破壊した。

アリス「流石。と言った所ね。」

今度はヘビーアームズの右脚ランチャーポッドから、「マイクロミサイル」が12発だけ発射される。

ストライクルージュはそれを、空中へのジャンプで回避する。

ビームライフルを発射するが、ヘビーアームズはシールドでそれを防御した。

続いてヘビーアームズは、もう12発のマイクロミサイルを、左脚ランチャーポッドから発射しようとするが、ストライクルージュの

ビームライフルでの攻撃で、破壊されてしまう。

アリス「うつ！」

ヘビーアームズの左脚が爆発により損傷する。

靈夢「そろそろ終わりね。」

ストライクルージュはミサイルの切れた、ヘビーアームズに空中から接近する。

アリス「それじやあ約よ。」

アリスと同じことを言われても、ストライクルージュは行動を変えない。

ヘビーアームズはストライクルージュに対して、ビームガトリングと頭部の「バルカン砲」、肩部の「マシンキャノン」、胸部装甲に隠されていた「胸部ガトリング砲」を一斉連射する。

靈夢「よつと。」

ストライクルージュはエールストライカーの機能を活かし、程よい滑空で攻撃を回避していく。

ヘビーアームズはついに弾切れを起こし、さっきまでの弾幕が消える。

ついにストライクルージュはビームサーベルを、ヘビーアームズの頭部に突き刺す。

。

靈夢「これで終わりで良いんでしょ？」

アリス「ええ。いいわよ。」

アリスは何らさつきまでと変わらない声で答えた。

別に自分の機体が負けて、悲しいという感情はないようだ。

靈夢「それじゃあ。」

ストライクルージュはビームサーベルを回収すると、夜空へ飛び立つて行つた。

アリス「ヘビーアームズには改修が必要ね。」

アリスはヘビーアームズを元の位置に戻すと、自宅の中へ入つて行つた。

冥界 西行妖

魔理紗「アレが春を集めてるのか。」

冥界には春を集める「西行妖」を発見したジャステイスの姿があつた。

幻想郷 上空

リリー・ホワイト「春ですよ。」

「リリー・ホワイト」の乗ったMS-06R-1A「高機動型ザク2改」が空中を飛び回りながら「ザク・マシンガン」を連射している。

咲夜「邪魔よ。」

エクシアはGNソードで高機動型ザク2改の右脚を切断する。

リリー・ホワイト「あ～れ～。」

高機動型ザク2改は少し下まで落ちた所で、エクシアのGNソードの追撃によつて機体は真つ二つになつた。脱出ポッドが発射され、リリー・ホワイトは撃破された。

咲夜「春告精ね。悪いけど邪魔なのよ。」

エクシアは先にある結界の方を向いた。

## 第十六話 「冥界の桜」

咲夜「あそこから冥界に行けるかも・・・。」

結界の元へ向かおうとするエクシアの前に、三機のRX-139「ハンブラビ」が現れた。

リリカ「ここから先へ行きたいの？」

ルナサ「そうなら、一曲聞いて行かない？」

メルラン「聞いて行かない？」

それぞれに搭乗するのは、「ルナサ・プリズムリバー」、「リリカ・プリズムリバー」、「メルラン・プリズムリバー」であり、騒靈の三姉妹だ。

咲夜「一曲？悪いけど先を急いでるの。それとても激しい曲調なんじやないの？」

霊夢「同感よ。」

エクシアの後ろからヘビーアームズ戦を終えたばかりの、ストライクルージュが現れた。

咲夜「霊夢じゃない。少し助けて欲しいんだけど。」

霊夢「勿論良いわよ。お互い様ね。」

二機は三機のハンブラビに向かっていく。

二機はタイミングを合わせて、ビームサーベル、GNソードを縦に振る。

しかし、MAの形態に変形したハンブラビに回避されてしまう！

ルナサ「始めるわよ。」

メルラン「私達のショー！」

三機は一定の速度で、エクシアとストライクルージュの周りを飛行していた。

エクシアがGNソードをライフルモードにして、ビームを発射するが当たる事は無かった。

リリカ「いくわよ。」

三機のハンブラビがストライクルージュに向かつて、一瞬の内に「海ヘビ」を射出、拘束した。

しかし、エクシアのGNソードで三つとも切断される。

咲夜「気をつけてよ。」

靈夢「分かつてゐるわよ。」

ルナサ「落ちなさい。」

ルナサ機が「フェダーラインライフル」でエクシアを狙い撃つ。

しかし、それはかわされ、ストライクルージュにビームライフルで反撃される。

靈夢「このつ！」

ストライクルージュはフェダーラインライフルを、ビームサーベルによつて切断。

ルナサ機は後退した。

咲夜「落とすわよ。」

一方、エクシアはメルラン機を追い詰めていた。

メルラン「もう！」

メルラン機は「背部ビーム・ライフル」でエクシアを撃つ。

エクシアは咲夜の咄嗟の判断でそれをGNシールドで防ぐ。

エクシアはGNソードをライフルモードにして、メルラン機の肩を狙い撃ち、破壊した。

揺れるメルラン機をエクシアのGNソードで右上から左下へ、斜めに一刀両断した。

エクシアはメルランの乗つた脱出ポッドを、マニピュレーターで受け取つた。

咲夜「正直に案内してくれればいいのよ。」

ルナサ機とリリカ機は、ストライクルージュへの攻撃を取りやめ、エクシアの方を向いた後、お互ひを向き合つた。

ルナサ「分かつたわよ。」

その後、ストライクルージュとエクシアはMA形態のハンブルabiに乗つた状態で、結界を越え、冥界へ突入した。

冥界 西行妖

幽々子「あら、何の用かしら？」

魔理紗「何で来るかぐらいは分かるんじやないか?」

西行妖の元でジャステイスと、異変の主犯「西行寺幽々子」の搭乗機であるAMX-004「キュベレイ」が対峙した。

幽々子「そうね。西行妖を止めに来たのかしら。」

魔理紗「その通りだ。その木に幻想郷の春を止められたら困るんだよ。」

ジャステイスはアンビデクストラス・ハルバードを構える。

キュベレイは左右の手首の袖口に内蔵されている、「ビーム・ガン／兼ビーム・サーベル」の刃を出現させる。

幽々子「結局切り結ぶ事になるのね。」

魔理紗「この状況じや仕方ないだろ。」

ジャステイスはキュベレイに接近、キュベレイはリアスカート裏に格納されている、

ビーム砲台端末「ファンネル」を一斉射出した。

冥界 白玉楼 階段

妖夢「あなた達、人間ね。」

「白玉楼」の階段を上つて来たストライクルージュと、エクシアの前に白玉楼の庭師、「魂魄妖夢」の駆るMBF-P02「アストレイレッドフレーム」が現れた。

靈夢「人間だつたら何なのよ。」

妖夢「ここは冥界。あなた達の世界に戻りなさい。」

咲夜「出来無いわね。」

咲夜の返答と共にアストレイは腰から打刀「ガーベラストレート」を、抜いた。

妖夢「なら・・・あなた達の春を奪うだけよ!」

咲夜「来るわよ。」

アストレイはもの凄い速度で、ガーベラストレートを使い、ストライクルージュの左腕を切断した。

シールドと左腕が同時に階段に叩き落とされる。

咲夜「靈夢、引きなさい。」

靈夢「何でよ。」

咲夜「あなたは魔理紗の援護に向かいなさい。」

二人共ルナサから、「赤いMSが私達を無視して、強引に冥界へ向かつた。」という情報を聞いていた。

それを魔理紗の乗るジャステイスだと二人は考えていた。

靈夢「分かつたわよ。でも・・やられるんじやないわよ。」

咲夜「勿論。」

ストライクルージュが去ると、エクシアはGNソードを深く構え、アストレイと向きあう。

次の瞬間、GNソードの刃とガーベラストレーの刃が激しい速度でぶつかり合つた。

今にも刃が折れてしまいそうな程、激しく交わり合つていた。

咲夜「ここで・・負ける訳にはいかない！」

靈夢「落とされてるんじゃないわよ、魔理紗。」

ストライクルージュは一機、西行妖の元へジャステイスの援護の為向かつた。

## 第十七話 「美しく優雅な光」

エクシアとアストレイは一時的に離れる。

エクシアはGNソードをライフルモードに、アストレイもビームライフルを向ける。

その後、移動をしながらの撃ち合いが始まった。お互いの攻撃は時にかすり、時に近くの障害物に当たる。

咲夜「くつ！」

エクシアは思い切ってアストレイに接近する。

アストレイはそれを受け入れる様に、ガーベラストレートを構えた。

GNソードとガーベラストレートが再度ぶつかりあう。

離れたと思ったらまた激突する。それを繰り返しながら二機はグルグルと辺りを周った。

妖夢「このおつ！」

アストレイはガーベラストレートを、上から大きく振り下ろす。

エクシアはすかさずGNシールドを構えて攻撃を防ぐ。

しかし、シールドは真っ二つに。すぐにシールドを離した為、幸い腕に損傷はなかった。

エクシアは直ぐ様にアストレイに向かって、GNソードを振り払う。

頭部を狙うも素早い反応で攻撃を回避される。

アストレイは後方に少し下がった後、突き出す形でガーベラストレートを構えた状態でエクシアに突進する。

咲夜「!!」

咲夜はいち早く反応し、回避行動をとるがサイドスカート部にガーベラストレートが突き刺さった。

エクシアはその状態でGNロングブレイドを取り出し、アストレイの右腕を切り落とした。同時にビームライフルを真っ二つに切り裂く。

妖夢「よくも！」

今度はガーベラストレートがエクシアの右腕を狙う。が、攻撃は逸れ右肩を半分程破壊して終わつた。

咲夜「まだ、これからよ。」

エクシアはGNショートブレイドを取り出し、アストレイに向かつて行く。

妖夢「来るのなら！」

アストレイは向かつて来たエクシアをガーベラストレートによつて、迎撃。

エクシアのGNショート、ロングブレイドはアストレイの右腕を完全に破壊。

アストレイはエクシアの右足のかかとを斬つた。

咲夜「まだ続きそうね。」

妖夢「そうみたい。」

西行妖をバツクに、アストレイとエクシアが己の刀を握り、向き合う。

それは、殺伐としていながらどこか美しい物があつた。

西行妖

魔理紗「何だよこの攻撃！」

ジャステイスはファンネルによるビーム攻撃を回避しながら、キュベレイに向かつてファトウム00を射出する。

運良くファンネルの攻撃を掻い潜り、キュベレイの元へ向かうがあつさり回避される。

魔理紗「ちつ。」

ファトウム00をバツクパツクに装着したジャステイスは、アンビデクストラス・ハルバードを振り回しながら、キュベレイに接近する。

魔理紗「おら！」

幽々子「愚かね。」

ファンネルは全てキュベレイの周囲に配置されていた。一斉射撃が行われ、全てのビームがジャステイスに向かつて行く。

魔理紗「!!」

ジャステイスはシールドも構える事なく、無防備なままその場に立ち尽くす。

その攻撃は緑色の光が一直線に伸び、鮮やかな光景を醸し出すものだつた。

幽々子「これで終わりかしらね。」

その時、ジャステイスとファンネルのビームの間に、シールドを構えながら介入する一機のMSがあつた。ストライクルージュである。

ストライクルージュはファンネルのビームをシールドで全て防ぎ、ジャステイスを守つた。勿論「アンチビームシールド」に損傷は無い。

靈夢「何やつてんのよ魔理紗！」

魔理紗「靈夢か！」

ジャステイスはアンビデクストラス・ハルバードを前に掲げ、ストライクルージュはビームサーベルを構え直す。

魔理紗「私と靈夢が組めば敵無しだぜ。」

靈夢「そうだといいけどね！」

靈夢のその言葉でストライクルージュとジャステイスは、キュベリヘブーストダッシュによる接近を開始する。

幽々子「一機増えても同じ事、落ちなさい。」

ファンネルはまた一斉射撃を行う。

それをストライクルージュとジャステイスは回避、ビームライフルで数個のファンネルを破壊する。

幽々子「やるものね、でも！」

今度はファンネルが一斉に二機の元へ向かう。四方八方からのビームがストライクルージュ、ジャステイスを襲う。

ビームは少しづつ二機に被弾し、装甲を僅かながら溶かしていく。

魔理紗「くそ！」

ジャステイスはファトウム00を水平に展開、「フライヤー形態」に移行する。

ファトウム00から絶え間なく「M9M9ケルフス 旋回砲塔機関砲」「MA-4Bフォルティス ビーム砲」の実体弾、ビーム砲がキュベレイに向かつて発射される。

しかし、ビーム砲はかわされ、実体弾はキュベレイに届く前にファ  
ンネルに破壊されるなどしてほとんど届いていなかった。

幽々子「あらあら・・・！」

キュベレイが背後からストライクルージュに襲われる。ビーム  
サーベルによつて右のバインダーが半分程破壊された。

キュベレイは迎撃として直ちにビームガンを発射するが、当たらな  
かつた。

幽々子「！」

今度は前方からジャステイスがアンビデクストラス・ハルバード  
で、左バインダーを同じく半分程破壊する。

魔理紗「もう諦めたらどうだ？」

靈夢「それが懸命よ。」

二機は並んで西行妖の前に立ち並ぶ。

## 第十八話 「紅白の蝶は春へ向かう」

咲夜「トランザム。」

GNロング、ショートブレイドを構えていたエクシアが、赤く染まつていく。

それと同時にアストレイは動き出した。

ガーベラストレートを振りかぶる。しかし、トランザム状態のエクシアには何の恐怖も無かつた。

妖夢「！」

エクシアは俊敏な動きでそれを回避、アストレイにコツクピット付近にダメージを加える。

妖夢「ううっ！」

妖夢の乗るアストレイのコツクピットに衝撃が走る。続いてアストレイの可動式バツクパツクが破壊される。

妖夢「負ける訳には！」

アストレイはガーベラストレートを振り払い、GNロング、ショートブレイドを破壊数する。

咲夜「ちつ、」

エクシアは両肩後部から「GNビームサーベル」を取り出し、アストレイに斬りかかる。

アストレイは「75mm対空自動バルカン砲塔システム イーゲルシユテルン」を発射するが、トランザム状態のエクシアには無力に等しかった。

アストレイは一時エクシアと距離を取る。体制を整える為だつたが、エクシアはまた直ぐにアストレイへ接近する。

妖夢「く、こうなつたら！」

アストレイは物凄い速度で向かつて来るエクシアに、ガーベラストレートを構えて接近する。

エクシアはGNビームサーベルを前に構える。アストレイもそれを受け止める様にガーベラストレートを横に構える。

咲夜「断ち切る！」

妖夢「アストレイの刃は！」

ガーベラストレートとビームサーベルが衝突する。

妖夢「うぐ・・・」

咲夜「うう、この！」

妖夢「！」

ガーベラストレートはビームサーベルによつて、切断された。

さらに、エクシアはXを描く様にビームサーベルを上から下へ振り下ろした。

頭部は半分、左腕は完全に破壊された。

さらに、GNビームサーベルを横に構え、両脚を右から左へ切り裂く。

アストレイの残つた胴体は地面に叩き付けられる。

エクシアはトランザムを解除、元の青い機体色が戻つて來た。

GNビームサーベルの刃を消し、柄をマニピュレーターから離した。

咲夜「はあ、やつと終わつたわね。あつちはどうかしら。」

エクシアは西行妖の方を向いた。

西行妖

幽々子「それは出来ないわ。」

靈夢「なら！」

魔理紗「やるまでだ！」

ジャステイスはファトウム00をキュベレイに向かつて射出。

ストライクルージュはキュベレイに斬りかかる。

キュベレイは射出されたファトウム00を回避、ビームサーベルでストライクルージュのビームサーベルに対応する。

キュベレイはビームサーベルで、ジャステイスの元へ戻ろうとするファトウム00を切り裂く。

魔理紗「この！」

ジャステイスはキュベレイの頭部を狙い、ビームライフルを発射する。

しかし、それは避けられビームはストライクルージュの横を通り過ぎていった。

靈夢「しつかり狙いなさいよ！」

魔理紗「分かってるよ！」

幽々子「あら、仲間割れ？」

リアスカート裏から再度ファンネルが射出される。

魔理紗「ちつ、」

ジャステイスはビームライフルで数個のファンネルを破壊する。ストライクルージュがキュベレイの本体へ攻撃を行おうとするが、残ったファンネルのビームがストライクルージュを襲つた。

靈夢「この！」

ストライクルージュはビームサーベルを投擲、一斉射撃を行おうとする残りのファンネルを全て破壊する。

靈夢「これでもう全部よ！」

魔理紗「このまま落とすぞ！」

ストライクルージュがキュベレイに残りのビームサーベルで斬りかかる。

しかし、ストライクルージュの左腕がキュベレイのビームサーベルで、破壊される。

魔理紗「靈夢！」

靈夢「大丈夫よ、魔理紗は速く！」

魔理紗「勿論だ！」

ジャステイスはアンビデクストラス・ハルバードで、キュベレイに接近戦を挑む。

何度も二つの刃がぶつかり合い火花が散る。その中で両機のいくつかの部位が少しづつ破壊されていく。

魔理紗「このおつ！」

ジャステイスは連続攻撃でキュベレイを圧倒していった。

しかし、幽々子は一筋縄でやられる様な女性ではない。それに対し テビームサーベル二刀流でキュベレイは対応する。

そしてキュベレイにとつて最後の一撃が放たれる。

幽々子「これで終わりよ。」

魔理紗「さあ、どうかな。」

ジャステイスはシールドを、キュベレイのビームサーベルに向かつて投げる。

それでジャステイスは、キュベレイのビームサーベルによる攻撃を遮断した。

幽々子「な！」

魔理紗「これで終わりだぜ！」

ジャステイスの薙ぎ払ったアンビデクストラス・ハルバードが、キュベレイの下半身を上半身から切断した。

さらにそこから左右のバインダー、腕を切り裂いた。

幽々子「失敗ね、油断しちゃった。」

キュベレイは大破。腕、脚部が爆発を起こす。

魔理紗「どうだ？私の腕は。」

靈夢「認めたくないけど、いい線行ってるんじゃない。」

魔理紗「何で上から目線なんだよ。」

その後、二機は帰投。河童達によつてキュベレイ、アストレイは回収された。

紫も幽々子の事を咎めたりはしなかった。

三機の活躍により「春雪異変」は終わりを告げた。

## 第十九話 「春の決闘」

河童のアジト

靈夢「はあ。今回も疲れたわね。」

魔理紗「前よりは楽だつたんじゃないか？」

靈夢と魔理紗は河童のアジトから、戻ってきた春の空を眺めながら、団子を食べていた。どうやら今回の異変に対する愚痴を溢している様だ。

靈夢「まあ、レミリア達の時よりは楽だつたと思うけど。」

魔理紗「だろ？」

靈夢「でも、魔理紗の方がよっぽど楽だつたでしょ？」

魔理紗「まあな。」

靈夢は全ての団子を食べ終えると、新たな串を手に取つた。

魔理紗は団子と一緒に用意されていたお茶を飲み干す。

靈夢「私の機体は壊れたけど、魔理紗の機体は無事でしょ？」

魔理紗「そうだが、前回は自爆したからな。その分前は靈夢の方が楽だつたと思うぜ。」

串団子が底をつき、食べるものが無くなつた魔理紗は寝転がる。

靈夢「でも、自爆前の機体の損傷は無かつたんでしょ。」

魔理紗「まあな、お前は何かに憑かれてるんじやないか。」

靈夢「憑かれてるし、疲れてるわ。」

靈夢は団子を全て食し、お茶を飲み干す。

二人して寝転がつた。そこに紫が現れる。

紫「あら、お疲れかしら。」

靈夢「当たり前でしょ、昨日帰つて来てからそのまま宴会したりで、少ししか寝られてないんだから。」

紫「じやあ、魔理紗かしらね。」

魔理紗「何がだ？」

紫の「こつちに来て。」という言葉と同時に、魔理紗は立ち上がり、MSデッキへ向かつた。靈夢は仮眠を取る事にしたようだ。

## MSデッキ

そこには修理中のストライクルージュと、ジャステイス以外に、青いMSと緑のMSが置いてあつた。

魔理沙「これは？」

紫「ストライク、イージス。妖怪に奪取されたブリッツと、同時期に開発したMSよ。」

そのMSはGAT-X102「デュエル」とGAT-X103「バスター」だつた。

魔理沙「で？」

紫「この二機の運用テストをしたいの。」

魔理沙「なるほどな。」

事を把握した魔理沙はデュエルの方へ向かつて行く。しかし、そこに、

藍「どけ！」

河童「え!？」

九尾の狐であり、紫の式神である「八雲藍」がデュエルに乗り込んだ。

紫「藍？」

魔理沙「何だ？ 知り合いか。」

紫「私の式神よ。」

魔理沙「は!?」

デュエルはデュアルアイを発光させて、起動した。  
そのまま河童のアジトの外まで出ていった。

紫「藍、どうしたの？」

藍「運用テストを行うんですね？ 私がこの！MSのテストパイロットを努めます。」

紫「・・・分かつたわ。」

魔理沙「じゃあ、私も。」

魔理沙はバスターのコツクピットに入り、バスターを起動した。

魔理沙「システムオールグリーン、出すぞ。」

バスターは河童のアジトを出て、デュエルの前に出た。

藍「覚悟。」

デュエルはバツクバツクからビームサーベルを取り出し、構える。  
一方、バスターは接近戦用の武装を持たない為、ストライクルージュのビームサーベルを押借する事にした。

魔理沙「始めるぞ。」

紫「いい？どちらかが一撃でも攻撃を喰らつたら、そこでテスト終了よ。」

藍「了解。」

デュエルはバスターに斬りかかる。バスターはそれを避けて逆に斬りかかる。

それをかわしたデュエルはビームサーベルを突き出す。

魔理沙「よつ。」

バスターはそれを避け、デュエルに斬りかかる。

魔理沙「貫つた！」

藍「・・・」

斬りかかるバスターに対してビームが飛んできた。

魔理沙「危ないな！何だ!?」

その攻撃を放つたのはオレンジ色のMS、MVF-M11C「ムラサメ（アンドリュー・バルドフェルド専用機）」MA形態だった。

魔理沙「どういう事だよ!?」

藍「お前だろ！ 橙をボコボコにしたのは。」

魔理沙「橙？ ああ、あの猫形MSに乗つてた奴か？」

橙の乗つたムラサメはMS形態に変形、着地した。

魔理沙「おい、どうするんだ紫？」

紫「付き合つてあげなさい。」

魔理沙「了解だ！」

バスターは両肩のハッチを開けて、「220mm径6連装ミサイルポッド」を発射した。

藍「何!?」

ミサイルは全弾デュエルに命中し、頭部、両腕を破壊した。

魔理沙「グウレイトオ!!」

デュエルはその場に倒れる。すかさずムラサメがバスターに向かつて行く。

橙「よくも藍様を！」

魔理沙「お前らが弱すぎるんだよ。」

バスターは「70J式改 ビームサーベル」を持つて向かつてくるムラサメに対して、右腰アームに接続されている「350mmガンランチャード」で迎撃を行う。

橙「え!?」

ムラサメの下半身の装甲に粘着榴弾がへばり付き、爆発する。

橙「あわわ。」

ムラサメもデュエルと同じくその場に倒れる。

魔理沙「どうつてもんだい。」

紫「浮かれてる場合じやないわよ、回収が大変になつたじやない。」

魔理沙「そんなの河童にやらせればいいじゃないか。」

バスターのコックピットから魔理沙が出てきて、紫の元に向かつた。

紫「悪いけど、もう二戦付き合つてもらうわよ。」

魔理沙「・・はいはい、分かったよ。」

魔理沙がバスターへ向かおうとすると、後ろから靈夢が走つて來た。

靈夢「うるさくて眠れないじゃないの!!」

魔理沙「じゃあ、手伝えよ。」

## 第二十話 「花見の季節」

靈夢は物凄く不機嫌そうな顔で辺りを見回す。

靈夢「何事よ。」

紫「MSの運用テストよ。」

靈夢は倒れるデュエル、ムラサメを見つめる。

靈夢「あと、どれくらいで終わる?」

紫「さあ、あなたが手伝ってくれれば速く終わるわ。」

魔理沙「私もさつきそう言つた。」

靈夢は少し悩んだ後、ストライクルージュの方へ向かつた。

魔理沙「お、やるのか?」

靈夢「ほら、始めるわよ。」

紫「じゃあ、ゲイツを出して。」

河童達が紫のMS、ZGMF-1600「ゲイツ(ラウル・クルーゼ専用機)」をMSデッキに移した。

魔理沙「おい、操縦出来るのか。」

紫「勿論よ。」

デュエルとムラサメは回収され、新たにその場にゲイツとストライクルージュが立つた。

靈夢「いくわよ!」

紫「来なさい。」

ストライクルージュはビームサーベルで攻撃を行う。それをゲイツは「模擬戦用ビームサーベル」で受け止める。

ゲイツはビームサーベルを横に払う。ストライクルージュはそれをジャンプで回避、ゲイツへビームサーベルを突き出す。

それを回避したゲイツはビームサーベルを再度横へ払う。今度はそれをストライクルージュはステップで回避、上から大きく斬りかかる。

紫「甘い。」

靈夢「!」

ゲイツのビームサーベルがストライクルージュの右腕を貫いた。

ストライクルージュはビームサーベルを左手に構え直し、ゲイツの頭部を貫いた。

魔理沙 「お相子だな。もぐもぐ。」

にとり 「そんなとこだね。もぐもぐ。」

二人は団子を食べながら戦いを鑑賞していた。

紫 「これで終わりよ。」

靈夢 「あつさりだつたけど、いいの？」

紫 「収穫はあるわ。」

靈夢と紫はコックピットから出て、河童のアジトへ戻った。

にとり 「どうだつた？」

にとりは団子の刺さっていた串をつまようじとして、使っていた。

紫 「収穫はあつたわ、新型機のロールアウトを急がないとね。」

にとり 「そうかい。」

紫 「ルージュももう、次の異変で使用をやめさせるわ。」

紫とにとりはMSデッキの方へ向かつた。

一方、靈夢と魔理沙は博麗神社へ向かつていった。

### 博麗神社

靈夢 「はあ、戻つて來たつて感じがするわね。」

魔理沙 「そうだな。」

二人は縁側でお茶をすすりながら、境内に咲く桜を眺めていた。

靈夢 「そういえば、もうお花見の時期ね。」

魔理沙 「人を集めないとな、その事なら協力するぜ。」

靈夢 「結局、準備は私だけなのよね。」

お茶を飲み終えた靈夢は立ち上がり、倉庫へ向かつた。

魔理沙は「じゃあ」と博麗神社を去つていった。

靈夢はだるそうにお花見の準備を始めた。博麗神社で花見をやる

事はほとんどの人間が知っている。

一部の人間には魔理沙が声をかける。だいたい一週間程花見をやる為、初日には人があまり集まらない。来るのはよっぽどの酒好きだけである。

二日酔いになつてさらに一週間近くは具合が悪くなる。飲み過ぎないように。そう思つても毎年二日酔いに襲われる。

靈夢「はあ、嫌だわ。」

靈夢は倉庫を見渡して、酒が無いことに気が付くと、人里へ向かつた。

魔理沙は家で、酒にこつそり何かを混ぜようか。と思い棚などをあさつていた。

紫とにとり、河童は新型機の制作を急いでいた。

藍（と橙）はあの後、紫にお仕置きをされたようだ。

しかし、デュエルのパイロットは藍に決まった。

それと同時にデュエルには、「アサルトシュラウド」と呼ばれる追加装甲ユニットが設けられた。シュラウドとは「死体を包む布」という意味だそうだ。

人里

靈夢「えと、お酒、お酒と。」

靈夢は店で酒をいくつか買うと博麗神社へ帰つた。

だいたいは客が持参する事が多いため、それほど酒は必要じやない。

料理もある程度作るだけで構わない。酒と同じく客人が持つてくるのだ。

紅霧異変終了時の宴会では、レミリア達にほとんどの酒と料理を要求していた。

今回も同じく幽々子達に肴を持つてこさせたらいいか。

そう思つた靈夢は大した用意もしないで、今で眠りについた。

未だに、こたつが置かれている。春は戻つて来た筈だ。

翌日

「文々。新聞」にて博麗神社で花見が開催される事が発表された。

おそらく、情報提供者は魔理沙だろう。

靈夢は読みながらそう考えていた。

「残念なのは異変のせいで、春が短くなり花見、宴会の開催期間、回数が短く、少ない事だ。」

この記述に分かつていながらにやけ、喜ぶ靈夢、残念がる参加者。それぞれの思考は別だった。

後片付けの手間が省けると喜ぶ靈夢だったが、それ以上に大変な事が起ころとは誰も、この時点では分からなかつただろう。

異変解決の為、またMSを駆り主犯を探し回らなければいけない。こんな事を靈夢は知る由もなかつた。いや、知らない方が幸せだ。また、それを知るすべもない。

ただ、時はただただ夏と、花見の開催日へと向かつていった。  
博麗神社の境内には桜が少しずつ花を散らせながら、咲き誇つていた。

靈夢はそれを見つめ微笑む。そこに魔理沙が手を軽く挙げながら神社にて来る。

誰もが花見、宴会を楽しみにしていた。

## 萃夢想編

### 第二十一話 「密と疎」

博麗神社において花見の開催が始まった。

例によつてたくさんの人人が集まつた。

それは人間から妖怪まで種族は様々だつた。  
しかし、花見（宴会）が開催されるに連れ、幻想郷に得たいの知れ  
ない妖気が高まつていた。

妖気は高まつていく一方だつたが、これといつて害は無かつた。  
次の宴会まであと3日。そこで靈夢は妖気の原因を突き止めるべ  
く、立ち上がつた。

河童のアジト

にとり「ストライクルージュ、発進どうぞ。」

靈夢「博麗靈夢、ルージュ出るわよ。」

ストライクルージュは飛び立ち、異変の犯人探しを始めた。

一方魔理沙も出撃の準備を始めた。

魔理沙「ジャステイスの修理が終わつて無い!?」  
にとり「うん、今出せるのはバスターだけだよ。」

魔理沙「分かつた、バスターで出る。」

バスターも出撃、靈夢とは別方向で犯人探しを始めた。

紅魔館

咲夜「何の用かしら？」

侵入して來たバスターをメイド長十六夜咲夜が、「ガンダムエクシ  
アリペア2」で迎える。

魔理沙「お宅らに用がある。」

咲夜「M Sじやなきやいけないの。」

魔理沙「まあ、異変の犯人がいるかもしれないからな。」

咲夜「それはないわね、被害も出てないんでしょ。」

魔理沙「知つてたのか、ますます怪しい。」

バスターは左腰アームに接続されている「94mm高エネルギー収束火線ライフル」を構える。エクシアリペア2も「GNソード改」を前に出す。

バスターがライフルを発射した事で戦闘は始まった。エクシアリペア2はビームを回避、切斷力の増したGNソード改の刃を輝かせ、バスターに接近する。

エクシアをバスターは6連装ミサイルポッドで迎撃する。それをGNソード改が切り裂く。エクシアの眼前でミサイルが連鎖する用に爆発する。

魔理沙「ちつ、」

バスターは収束火線ライフルを前に、ガンランチャーを後に連結、「超高インパルス長射程狙撃ライフル」でエクシアを狙い撃つ。

放たれたビームがエクシアリペア2の左腕を貫いた。衝撃で吹き飛んだものの、空中で体制を立て直し、GNビームダガーが投擲される。

バスターはそれを横に避け、超高インパルス超射程狙撃ライフルを再度発射する。

その攻撃は外れ、エクシアリペア2が接近する機会を与えてしまった。

咲夜「帰つてもらうわよ。」

GNソード改がバスターに迫る。バスターは超高インパルス超射程狙撃ライフルを発射して攻撃を防ぎ、エクシアリペア2の右腕を破壊。

バスターの足元にエクシアリペア2が倒れこんだ。

魔理紗「先に進ませて貰うぜ。」

咲夜「しようが無いわね。異変の犯人なんていないけど。」

機体の損傷を気にしての事なのか、咲夜は早々に館の奥へ戻つて行つた。

魔理紗「よーし。」

バスターは地下図書館へ向かつた。

## 博麗神社

ストライクルージュで神社周辺を飛行していたところ、神社に一機のMSのある事に気が付いた靈夢は、着地、アストレイレツドフレームに乗る妖夢と会話を始めていた。

靈夢「何しに来たのよ。」

妖夢「ええ、実はこの霧が。」

なんと、いつの間にか妖霧が神社を覆っていた。

妖夢は異変解決の行動中、それにいち早く気が付いた様だ。

靈夢「そうなの。」

ストライクルージュはビームサーベルを取り出し、シールドを前に出す。

アストレイもそれに反応してガーベラストレートを抜く。

妖夢「別に私は何も。」

靈夢「妖夢と妖霧繫がり、そんな所かしら。」

妖夢「理不尽な巫女ね。」

アストレイはガーベラストレートを横に突き出し、ビームサーベルの柄の破壊を試みた。しかし、その刃は光の刃で受け止められる。

靈夢「このつ！」

ストライクルージュはライフルを一旦放した。もう一本のビームサーベルを取り出し、アストレイの右腕を切断した。

アストレイはガーベラストレートをストライクルージュの頭部に向けて、振り払う。

しかし、攻撃は当たらず、イーゲルシユテルンで刃に傷をつけられてしまつた。

続いてアストレイはガーベラストレートを突き出す、それはシールドで防がれる。

ストライクルージュのビームサーベルによるカウンター攻撃で、アストレイのシールドは真つ二つに切斷される。

そこでアストレイは動きを止めた。

靈夢 「降参かしら?」

妖夢 「私は元々異変には・・・」

靈夢 「そうなの?」

ストライクルージュはビームサーベルをしまい、戦闘を中止した。

靈夢 「じやあ、異変の犯人は別にいるの?」

妖夢 「そういう事なんじや。」

妖夢は靈夢も異変の犯人を知らない。という事を聞くと白玉楼へ帰つていった。

しかし、靈夢には出現した妖霧から、近くに犯人がいる事は分かつていた。

靈夢 「ほら、分かつてるのよ。出てきなさい。」

「バレたか。」という声と共に妖霧が姿を変え、鬼の少女「伊吹萃香」が現れた。

靈夢 「妖霧の正体はあんただつた訳?」

萃香 「その通り、妖霧になつて宴会をさせてたんだよ。」

靈夢 「犯人なら退治するまでよ。」

萃香 「私は負けないよ。」

奥の方でMSの緑色のデュアルアイが発光した。  
鬼との戦闘が始まろうとしていた。

## 第二十二話 「太古の機動兵器」

萃香は神社の奥の方へ走つていった。するとMSの立ち上がる音が聞こえた。

そのMSは「ガンダムバルバトス（第四形態）」だつた。

靈夢「いくわよ！」

ストライクルージュはビームサーベルを持って、バルバトスに向かつて走つていく。

萃香「そんなんじや！」

バルバトスは「メイス」を振る。その攻撃はストライクルージュのシールドに命中し、衝撃によつて後ずさりをさせる程だつた。

萃香「この！」

バルバトスは上からメイスを振り下ろした。それをストライクルージュはシールドで防衛するが、衝撃で後方に倒れる。

萃香「貰つた！」

バルバトスは倒れるストライクルージュへメイスを突き落とす。その攻撃を間一髪で回避したストライクルージュは、ビームサーベルで反撃する。

メイスに対してビームサーベルで対抗するが、威力の差は歴然であり、簡単にあしらわれてしまつた。

靈夢「なら！」

ストライクルージュはアストレイ戦で手放していた、ライフルを拾つて攻撃を始めた。

ビームがバルバトスへ何度も発射されるが、バルバトスはそれを俊敏な動きで回避していく。

萃香「いくよ!!」

バルバトスはビームを掻い潜り、ストライクルージュに接近、メイスを叩きつける。

靈夢「うつ！」

フェイズシフト装甲にダメージは無いが、衝撃がコツクピットに伝わつて来る。

そんな事お構い無しにバルバトスは、何度もメイスを叩きつける。フェイズシフト装甲といつても、徐々にダメージが加わっていく。

萃香「トドメ!!」

バルバトスはメイスを大きく振り下げる。それをストライクルージュは再度シールドで防いだ。

しかし、衝撃は大きくストライクルージュは吹き飛んだ。

靈夢「まだまだ、これからよ。」

ストライクルージュは再び立ち上がった。

### ヴァル魔法図書館

魔理紗「よお。」

パチユリーリー「・・・何しに来たの。」

図書館にいたパチユリーリーは、MSの調整を自らの手で行っているようだ。

パチユリーリーの後にはGN-008「セラヴィーガンダム」があつた。

魔理紗「今回の異変だが・・・。」

パチユリーリー「私を異変の犯人だと思ったの?」

魔理紗「そういう事だ。」

パチユリーリーは「はあ~。」と呆れた顔でため息を付くと、セラヴィーに乗り込んだ。

セラヴィーが起動し、バスターに歩み寄る。

パチユリーリー「今回の異変は自然現象に限りなく近いものなの。」

魔理紗「自然現象か・・・。」

パチユリーリー「そう、自然現象に誰かが少し手を加えた感じなの。」

魔理紗はしばらくコツクピットで考えた後、再び顔を上げた。

パチユリーリー「納得したなら帰りなさい。」

魔理紗「それはな・・・。」

バスターはガンランチャーを前に、収束火線ライフルを後に連結した「対装甲散弾砲」をセラヴィーへ発射した。

魔理紗「疑わしきは罰せよ、つてな。」

パチユリーリー「罰せず、でしょ。」

煙の中からGNフィールドを展開しているセラヴィーが見えた。

パチュリー「帰りなさい。」

魔理紗「またこの展開かよ。」

セラヴィーのGNフィールドはヴァーチェのそれより、発生までの時間が短縮されている。

パチュリー「前みたいにはいかないわよ。」

セラヴィーは「GNバズーカ2」を発射。

バスターはそれをよけるが、二発目が発射され、それが左肩に直撃した。

バスターがセラヴィーへ立ち向かおうとすると、紫から通信が入った。

紫「撤退よ。」

魔理紗「何でだよ、こいつらが異変の・・・」

紫「靈夢が異変の犯人と交戦中みたい。」

魔理紗「・・・」

その後バスターは帰還、新型機の運用テストに再び付き合う事となる。

博麗神社

靈夢「この！」

ストライクルージュは思い切りビームサーベルを振り下ろし、メイスの持ち手部分を切断した。

バルバトスは一時後退すると「太刀」を握りしめ、再びストライクラージュに襲い掛かった。

ビームサーベルと太刀が激しく何度もぶつかり合う。

離れては引き寄せられる様に二つの刃は衝突する。

萃香「おりや！」

バルバトスの急接近、太刀がストライクルージュの左腕を貫いた。

靈夢「甘いのよ！」

ストライクルージュは接近していたバルバトスの右腕に、ビームサーベルを突き刺した。

萃香「あつ!!」

バルバトスが離れようとすると、ストライクルージュは完全に右腕を破壊した。

左手に太刀を構え直したバルバトスが攻撃を続行する。

ストライクルージュは距離を取り、そこからビームサーベルを投擲した。

靈夢「終わりよ！」

投擲されたビームサーベルはバルバトスの右脚を切断した。  
倒れるバルバトスに対し、ストライクルージュはもう一つのビームサーベルでトドメをさした。バルバトスの頭部が爆発する。

萃香「負けちゃった。」

靈夢「当たり前よ。」

こうして今回の異変は無事解決、宴会の回数も落ち着いた。  
靈夢は萃香に宴会の片づけをしてもらう事にした。  
幻想郷の日常が戻った。

河童のアジト

魔理紗「そいつは化物だぜ。」

河童のアジトの近くの草原には大破、倒れるバスター。  
紫の乗る一機のMSの姿があつた。

紫「運用テストは無事終了ね。」

## 永夜抄編

### 第二十三話 「偽りの満月、自由の翼」

初秋のある日、幻想郷の夜空では満月が光り輝いていた。  
平和な夜であつた。

博麗神社の巫女である靈夢は、少量の団子を用意して縁側で満月を眺めていた。

定期的に団子を口に持つていきながら、お月見を楽しんでいた。  
目的は満月の鑑賞ではなく、団子を食す事なのかもしかつた。  
最後の団子に手を伸ばそうとしたその時、目の前に見覚えのあるス  
キマが出現。

中からいつも通り、傘を差した八雲紫が現れた。

靈夢「何の用。」

紫「やつぱり、気づいていないようね。」

縁側の前に立ち尽くす靈夢には、紫の言う事が分からぬ様だつ  
た。

そんな靈夢に対し紫は語り始めた。

紫「いま、幻想郷では異変が起こっているわ。」

靈夢「異変？」

頭を傾げる靈夢を他所に紫は顔を上げて月を見つめた。  
それに反応して靈夢の顔も月を向いた。

太陽の光を反射して輝くその球体は変わりなくそこに在つた。

紫「月の様子がおかしいわ、よく見てみなさい。」

靈夢「変わりないでしょ・・ただの満月よ。」

紫「そう、満月の筈よ、でも少しかけているわ。」

そう、本来満月である筈の月が少し欠けていたのだ。

それは人間たちにとつてはまったく問題の無い事であつた。

しかし、月の光に依存する妖怪たちにとつては死活問題であつた。

紫「これはれつきとした異変よ。」

靈夢「それで調査に行くわよ、つて事？」

紫「そういう事。」

いつも通り嫌そうな靈夢の表情が紫に返つてくる。  
靈夢は頼みごとをすると大体この様な反応をする。  
しばらくして靈夢が閉ざしていた口を開いた。

靈夢「分かったわよ、異変解決は私の仕事だもんね。」

打つて変わつて、明るく自信に満ちた表情で靈夢は答えた。

紫「そうと決まれば行くわよ。」

軽く微笑んだ紫はスキマを開き、靈夢と共にその中へ消えて行った。

時を同じくして、月に違和感を覚えた者が二人いた。

レミリア・スカーレットと西行寺幽々子である。

### 紅魔館

レミリア「私はエピオンで出るわ、館の事は任せるわよ。」

咲夜「はい・・しかし。」

エピオンのコックピット前で二人は話し合っていた。

どうやら、レミリアも異変解決の為に動こうとしている様だ。

レミリア「じゃあ、出るわ。」

咲夜はエピオンのコックピットから離れた。  
数十秒後エピオンは出撃した。

咲夜は新たな搭乗機GN-0000RE+GNR-010「ダブル  
オーライザー（粒子貯蔵タンク型）」へ向かつた。

妖精メイド「出るんですか？でもさつきお嬢様が・・・」

咲夜「いいの、出るわ。」

ダブルオーライザーもエピオンと同じく出撃した。

空中でダブルオーライザーは飛行するエピオンに追いついた。

レミリア「咲夜！？」

咲夜「私も付いて行きます。」

レミリア「・・・しようが無いわね。」

エピオンとダブルオーライザーは異変解決に向かつていった。

白玉楼

幽々子「行くわよ、妖夢。」

妖夢「はい。」

白玉楼ではキュベレイとアストレイレッドフレームが出撃しようとしていた。

この二人も月の異変に気が付いていた。

この後、二機はフラフラと異変解決に出発した。

河童のアジト

にとり「やあ、遅かつたね。」

靈夢「ん？」

にとり「魔理紗達はもう出たよ。」

「そうなの。」と紫は二人の元を去つていった。

それに靈夢は続いた。

靈夢「ルージュは？」

紫「靈夢には新型を使って貰うわ。」

靈夢「新型？」

会話をする間に二人は二機の新型の元へ着いた。

それは白いMSと灰色のMSだった。

ZGMF-X10A「フリーダム」とZGMF-X13A「プロヴィデンス」だ。

紫「フリーダムよ。」

靈夢「フリーダム・・。」

フリーダムを見つめる靈夢の瞳は輝いていた。

紫「出るわよ。」

靈夢「うん。」

決意に満ちた表情を見せた靈夢はフリーダムのコックピットに入った。

モニターが光りバクロニムが表示された。

「ZGMF-X10A

F R E E D O M

G· e n e r a l

U· n i l a t e r a l

N· e u r o — L i n k

D· i s p e r s i v e

A· u t o n o m i c

M· a n e u v e r

C o m p l e x』

その文字が消えるや否や、メインモニターにカタパルトが見えた。

フリーダムはカタパルトに乗り、発射姿勢を取つた。

靈夢は一回深呼吸をした。

靈夢「博麗靈夢、フリーダム行きます。」

フリーダムはカタパルトから発射された。

大空に展開前の翼がなびいていた。

紫「八雲紫、プロヴィデンス出るわよ。」

続いて紫のプロヴィデンスがカタパルトから発射された。

大空に二機は並んでいた。

その姿は限りなく勇ましい物だつた。

フリーダムは背部に装備された左右5対の「能動性空力弾性翼」を広域展開し、「高機動空戦（ハイマット）モード」形態に移行。

そのままフリーダムは前へと突き進んだ。プロヴィデンスもそれに続く。

二機は夜を終わらせる為、いつもの幻想郷を取り戻す為、月が輝く夜空を翔んでいった。

こうして「永夜異変」は始まった。この先には難題が待つてゐる。果たして人間と妖怪達によつてこの異変を解決できるのだろうか。幻想郷に平和を取り戻す事が出来るのか。

## 第二十四話 「夜空の蟲と唄」

靈夢「月がおかしいとか言つといて、別に何も無いじゃない。」

紫「まあ、目的地に付けば分かるわ。急ぐわよ。」

夜空を翔ぶフリーダム、プロヴイデンスの前に「デイフェンサーユニット b 装備」を装着した巡航形態のRGZ-95「リゼル」が姿を現した。

靈夢「こいつを片付けてから？」

紫「そうよ。」

フリーダムはウイングを元の状態に戻し、「ルプス ビームライフル」のトリガーを引いた。威力はストライクなどのライフルを凌駕する程だ。

しかし、相手の素早い行動で放たれたビームは回避された。

リグル「ふふ、当てる気はあるの？」

靈夢「ある訳ないでしょ、テストよ。」

パイロットの「リグル・ナイトバグ」に薄っすら笑われながら、フリーダムはリゼルヘビームライフルでの攻撃を行っていた。

今のところ、プロヴィデンスは空中を漂っている。

靈夢「紫は何やつてるのよ。」

紫「あなただけで十分でしょ？」

靈夢「まあ・・ね。」

リゼルも負けじと前腕部に装備している「ビームサーベル」を取り出し、フリーダムに接近戦を挑もうと向かつて行く。

フリーダムも「ラケルタビームサーベル」を両腰から二本取り出し、ビーム刃を出現させてリゼルに向かつて行つた。

空中で何度もビームサーベルがぶつかり、火花が散る。

数度目でフリーダムがリゼルの右腕を切り裂いた。

リゼルは後ろを向いて硬直するフリーダムに向かつて、ビームサーベルを収納、ウイングユニットに接続されている「メガビームランチャー」を構え、発射した。

しかし、その攻撃はシールドで防がれる。

次の瞬間、シールドのガンポートからビームライフルが数発発射され、リゼルの両脚を爆発させた。

リゼルは重力に引かれ、高度を落としていく。

フリーダムは収納していたビームサーベルの内、一本を取り出し、落下するリゼル目掛けて急速接近した。

リグル「!!」

リゼルはフリーダムのビームサーベルによつて、腰の所で機体を真つ二つに切り裂かれてしまつた。

脱出ポッドが射出され、リゼルは大爆発する。

それを背にしてフリーダムはビームサーベルを納刀した。

紫「フリーダムの調子は良いようね。」

靈夢「パイロットを褒める事は出来ないの？」

紫「分かってるわよ、良くやったわね。」

フリーダムとプロヴィデンスはさらに先へと進んだ。

一方、魔理紗のジャステイスと、アリスのXXXG-01H2「ガンドムヘビーアームズ改(EW版)」は別ルートで異変解決を開始していた。

ちょうど、空を翔ぶ量産型MSリゼルの相手をしていた所だつた。

魔理紗「いつから幻想郷にはこんなにMSが増えたんだ?」

ビームサーベル、リフターを駆使してリゼルを撃墜しながら、魔理紗が呟いた。

それに対して、「ダブルガトリングガン」を使いリゼルの相手をするアリスが答えた。

アリス「河童のせいよ。紅魔館がMSを売つてゐるなんて話も聞いたけど。」

魔理紗「もう少し環境を考えろよな。MSを増やし続けたら幻想郷がどうなるか。」

少し間を置いてからアリスが口を開いた。

アリス「だから、私達はこうしてMSの数を減らしてゐるんでしょ?」

魔理紗「残骸も残らないし、本当だよな。」

付近にいたリゼルを全て撃破した二機は空中で背中を合わせた。

? 「何処に行くの?」

遠くからファイターモードのGW-9800「ガンダムエアマスター」が、二機へ向かつて来た。

魔理紗 「妖怪退治兼異変解決つてとこだ。」

「ミスティア・ローレライ」が自信に満ちた様な表情をする。

ミスティア 「私に喧嘩を売つてるの?」

魔理紗 「売るどころか、無料配布だよ。」

アリス 「妖怪なのね。」

ガンダムエアマスターがウイングガンダムのそれとは違う「バスターライフル」から、ビームを発射する。

それをかわしたジャステイスとヘビーアームズだったが、バスターライフルは連射性能及び速射性能を活かして、ビームで二機を追いかける。

魔理紗 「しつこいんだよ!」

ジャステイスは「バッセル ビームブーメラン」を投擲する。

光輪状のバッセルがエアマスターへ飛んで行く。

しかし、それは避けられてしまう。

そして、エアマスターにMS形態に戻らせる隙を与えてしまった。

ミスティア 「甘いのよ!」

魔理紗 「どつちがだよ!」

ジャステイスの元へ戻ろうとしていた、バッセルがエアマスターの右脚を切り裂いた。

エアマスターが「ヘッドバルカン」を発射する。

バッセルを上手いこと回収したジャステイスは、直ちにその場を離れる。

入れ替わつてヘビーアームズが前に出て、エアマスターへダブルガトリングガンを連射する

勿論バルカンが威力で劣るため、エアマスターは酷く損傷した。

そのエアマスターをジャステイスが、ビームサーベルで真つ二つに叩き斬つた。

脱出ポッド射出後、エアマスターは空中で爆散した。

魔理紗「よし、行くぞ。」

ジャステイスはリフターに、ヘビーアームズは放置していたベースジャバーに乗つて先へと進んだ。

その頃、エピオン、ダブルオーライザーが人里へ近づこうとしていた。

## 第二十五話 「歴史に消えた人里」

レミリアのガンダムエピオンと、咲夜のダブルオーライザーは、人里へ到着しようとしていた。

MA形態のエピオンにダブルオーライザーが乗つて移動している。

咲夜「そろそろ人里が見える筈です。」

レミリア「人里ね・・・。」

コツクピットで地図を見ながら、咲夜はレミリアにそう教えた。

レミリアはそれを聞いて何か考えている様だ。

咲夜「どうされますか。」

レミリア「人里に降りるわ。」

地図をしまった咲夜は顔を上げて、モニターで人里の位置を確認する。

しかし、付近にある筈の人里のは見えなかつた。

人も家も何も無かつた。

レミリア「その人里は何処なの？」

咲夜「えと、何故降りるのですか？」

レミリア「エピオンの補給の為に決まつてるでしょ。」

恐らくエピオンのスラスターの容量が気になるのだろう。レミリアはそう言つた。

今では、人里には護身用にMSを数機配備しているという事も、珍しくはないのだ。

主に河童が制作、比較的安く販売しているMBF-M1「M1 アストレイ」を配備している事が多い。

それに対して河童は妖怪にZGMF-1017「ジン」を提供しているんだとか。

とにかくエピオンは、咲夜の導きで地図に人里と示されている地点に、降下、着地した。

レミリア「人里なんてないじゃない。」

咲夜「ある筈なんですが・・・。」

二人はMSから降りて外を見回した。

しかし、小屋などの建造物は一切見当たらず、人もいなかつた。ただ広い空間がそこにあるだけである。

すると、突如として足音が二人の耳に入つて來た。音の聞こえて來る方を向くと、白髪の一人の女性が歩いて來ていた。

その女性は二人の前で立ち止まつた。

慧音「お前達だな、里を襲おうとしていた奴は。」

その女性、「上白沢慧音」はエピオンとダブルオーライザーを、里を襲撃しようとしているMS、レミリアと咲夜をそのパイロットと考えている様だ。

勿論、二人は顔を見合わせ、困惑する。

慧音「ここには何もない様に見えるだろ？」

咲夜「ええ、ここは人里の筈なのに。」

レミリア「そうなの？」

立ち尽くすレミリアを置いて、二人は会話を始めていた。

慧音「私がこの里を保護した。」

咲夜「保護？」

慧音「ああ、侵略者から護るために。」

咲夜「聞き捨てならないわね。」

咲夜の慧音への眼差しが険しくなつた。

それと同時に慧音は鼻で笑つた。

慧音「何か違う事でもあつたか？」

咲夜「お嬢様、お時間を頂いてもよろしいですか？」

レミリア「速く済ませてね。」

レミリアはエピオンのコックピットに戻り、観戦する事にした。咲夜も同じくダブルオーライザーの元へ移動した。

慧音「結局、こうなるのか。」

遠くの森林に慧音が消えていった。

数秒後、MSの起動音が聞こえた事は言うまでもない。

フリーダムとプロヴィデンスは異変解決の足を止めていた。

それは、先程河童のアジトから発信した、藍のデュエルとサブフライトシステム「グゥル」を待つためだ。

フリーダムはいいとして、プロヴィデンスは推力に心配があつた。その為、藍を待つことは戦力の増強になるし、サブフライトシステムの獲得にもなるので、一石二鳥だつた。

フリーダムとプロヴィデンスが地上に降りて、待つ事數十分。

藍「紫様、お待たせしました。」

上空にグゥルに搭乗するアサルトシュラウドを装着したデュエル、後を追つてきたグゥル二機が到着した。

紫「ご苦労。さあ、行くわよ。」

靈夢「はいはい。」

フリーダムが飛び上ると同時に、「はい。は一回。」という紫の返答が靈夢に返つて來た。

プロヴィデンス、フリーダムも念のためにグゥルに搭乗、三機は行くべき場所を目指して飛んでいった。

### 夢幻の妖魔チーム

森の奥から慧音の搭乗するMSが、立ち上がったダブルオーライザーの元へ向かつて來た。

そのMSの基本色は白かつた。人里の所有物だと思われる。それを考えると信じられない程、良い出来栄えだつた。

明らかに量産機とは違うその姿。

人里に置くには勿体無い程だ。「人里を保護するのがこいつの役割だからかな?」と咲夜が慧音のMSに疑問を抱き始めた。

それと同時に慧音が語り始めた。

慧音「この機体は河童が極秘で開発したんだ、知っている筈がない。性能を見て今後の開発に活かす為に安く作つて貰つたんだ。」

咲夜「なるほど。」

慧音「妖怪からこの里を護るためにも、この機体の事を内密にしているんだ。壊す訳にはいかない。」

独り言の様に咲夜にそう言葉を投げかけると、慧音は機体を一気に前進させた。

慧音「あと、この機体の特殊システムはお前のソレに似ているな。」

咲夜「あら、そうなの。」

咲夜も機体を前進させた。

ダブルオーライザーに向かつてくるMSの名はCB—0000G／C「リボーンズガンダム」だ。

リボーンズガンダムは背部に2基を装備された「大型GNビームサーベル」を、一本取りだし、前に掲げた。

ダブルオーライザーはそれに反応し、GNソードⅢを構える。

今、二つの刃が交わろうとしていた。